原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第37集

原の辻遺跡

（はる　つじ）

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書⑤

2007

長崎県教育委員会

正誤表

頁・行	正	誤
表紙	２００８	２００７
背表紙	２００８	２００７
３１頁　１７行	原の辻遺跡では、弥生時代前葉に…	原の辻遺跡では、弥生時代中期前葉に…

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第37集

原の辻遺跡

（はる　つじ）

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書⑤

Pho. 1　遺跡全景

Pho. 2　池田大原地区　遺構検出状況①

Pho. 3　池田大原地区　遺構検出状況②

Pho. 4　池田大原地区　１号濠下層出土遺物

Pho. 5　不條地区　ＳＸ２出土遺物

発刊にあたって

本書は主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴い平成18年12月から平成19年３月に実施した，原の辻遺跡の発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は『魏志倭人伝』に記される「一支國」の王都として特定されています。弥生時代におけるクニの実体を解明できる稀有の遺跡として，平成12年度に国特別史跡に指定された重要な遺跡です。

今回は遺跡北西側低地部の不條地区，遺跡南西側丘陵部の池田大原地区，遺跡南側の原ノ久保Ａ地区の３地区を調査しました。池田大原地区はこれまでの調査歴が少なく，新たな発見が期待される地域です。原ノ久保Ａ地区では平成８年度の範囲確認調査において弥生時代後期後半から終末期にかけての「一支國」における有力集団の墓域が確認されています。また不條地区では平成10年度来の諸調査において，重要な遺構や遺物の確認がなされています。

今回の調査では，以上のような過去の調査成果を十分に考慮して調査を行いました。

最後に，調査に際して多くの方々にご協力頂いたことに深謝するとともに，本報告書が研究の一助になれば幸いです。

2008年１月31日

長崎県教育委員会教育長　横　田　修一郎

例　　言

1．本書は，主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴って平成18年度に実施した原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本書は，平成19年度主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査の予算にもとづいて発行した。

3．本書に収録した遺跡の調査地は長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触および石田町石田東触に所在する。

4．本事業は長崎県壱岐地方局建設部建設課道路班が主体となり，調査主体は長崎県教育委員会が，調査担当は原の辻遺跡調査事務所が行った。

5．調査組織は下記の通りである。

(1)　平成18年度　※（　）の現所属は平成19年９月現在

原の辻遺跡調査事務所	所　　長	安楽　勉	
	係　　長	村川　逸朗	
	係　　長	森崎　伸一	
	文化財保護主事	川畑　敏則	
	文化財保護主事	寺田　正剛	（現長崎県教育委員会学芸文化課文化財班）
	文化財保護主事	林　隆広	※調査担当
	文化財保護主事	溝上　貴稔	※調査担当（現長崎県立壱岐高等学校）

(2)　平成19年度

原の辻遺跡調査事務所	所　　長	安楽　勉	
	課　　長	宮崎　貴夫	
	係　　長	村川　逸朗	
	係　　長	森崎　伸一	
	文化財保護主事	川畑　敏則	
	文化財保護主事	林　隆広	※報告担当
	文化財保護主事	小林　利彦	

6．本書に収録した遺物の実測および製図は原の辻遺跡調査事務所が行った。

7．本書収録の遺物，図面，写真類は原の辻遺跡調査事務所で保管している。

8．平面直角座標は旧日本測地系を使用している。

9．自然科学分析は古環境研究所に委託した。

10．本書では原の辻遺跡関連報告書を略称で引用している（Tab. 3参照）。

11．本書では挿図図版を Fig.，表組図版を Tab.，写真図版を Pho. で表記している。

12．本書の執筆および編集は林が行った。

遺跡内に設置された既存の基準点について，平成14年度４月１日の測量法の改正に伴い壱岐地区に高さの基準である国家水準点が設置され，標高の観測を再度実施したところ，0.417mの比高差があったことが判明した。したがって，平成17年度の調査および報告書から－0.417mの修正を行った新しい標高値を採用するものとする。

本 文 目 次

Ⅰ章　遺跡の立地する環境

1．地理的環境……1

2．歴史的環境……2

Ⅱ章　調査に至る経緯

1．原の辻遺跡における調査経緯……6

2．本事業調査の経緯……7

Ⅲ章　調査

1．不條地区……9

(1)　調査概要

(2)　基本層序

(3)　遺構と遺物

①濠（ＳＤ３・ＳＤ５）

②溝状遺構（ＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ４）

③土坑（ＳＸ１・ＳＸ２）

(4)　総括

2．池田大原地区……17

(1)　調査概要

(2)　基本層序

(3)　遺構と遺物

①１号濠

②２号濠

③不明遺構

④ピット群

(4)　総括

3．原ノ久保地区……32

(1)　調査概要

(2)　基本層序

(3)　遺構

(4)　総括

附編　自然科学分析……39

挿図(Fig)目次

Fig. 1　壱岐島の位置図……1
Fig. 2　壱岐島内主要遺跡分布図……5
Fig. 3　調査地区位置図……6
Fig. 4　不條地区遺構配置図……7
Fig. 5　池田大原および原ノ久保地区
　　遺構配置図……8
Fig. 6　不條地区全体図……9
Fig. 7　不條地区遺構図および土層断面図…10
Fig. 8　不條地区ＳＤ３出土遺物図……12
Fig. 9　不條地区ＳＤ５出土遺物図……12
Fig. 10　不條地区ＳＤ１出土遺物図……12
Fig. 11　不條地区ＳＤ２出土遺物図……13
Fig. 12　不條地区ＳＤ４出土遺物図……13
Fig. 13　不條地区ＳＸ１出土遺物図……14
Fig. 14　不條地区ＳＸ２出土遺物図……15
Fig. 15　池田大原地区全体図および
　　基本土層断面図……18
Fig. 16　池田大原地区１号濠遺構図
　　および土層断面図①……20
Fig. 17　池田大原地区１号濠遺構図
　　および土層断面図②……21
Fig. 18　池田大原地区１号濠
　　上層出土遺物図……22
Fig. 19　池田大原地区１号濠
　　下層出土遺物図①……23
Fig. 20　池田大原地区１号濠
　　下層出土遺物図②……24
Fig. 21　池田大原地区１号濠
　　下層出土遺物図③……25
Fig. 22　池田大原地区１号濠
　　下層出土遺物図④……26
Fig. 23　池田大原地区２号濠・不明遺構図
　　および土層断面図……28
Fig. 24　池田大原地区２号濠出土遺物図……28
Fig. 25　池田大原地区不明遺構出土遺物図…29
Fig. 26　池田大原地区ピット群図……30
Fig. 27　原ノ久保地区全体図……32
Fig. 28　原ノ久保地区濠土層断面図……32

表組(Tab)目次

Tab. 1　壱岐・対馬面積比率表……1
Tab. 2　壱岐島内遺跡・史跡一覧表……5
Tab. 3　調査区・報告書対応表……7
Tab. 4　池田大原地区１号濠出土
　　甕形土器口縁部時期別集計表……31
Tab. 5　土器観察表①……33
Tab. 6　土器観察表②……34
Tab. 7　土器観察表③……35
Tab. 8　土器観察表④……36
Tab. 9　石器観察表……36

写真(Pho)目次

Pho. 1　遺跡全景
Pho. 2　池田大原地区　遺構検出状況①
Pho. 3　池田大原地区　遺構検出状況②
Pho. 4　池田大原地区　１号濠下層出土遺物
Pho. 5　不條地区　ＳＸ２出土遺物
Pho. 6　池田大原地区　基本層序……37
Pho. 7　池田大原地区　１号濠土層断面……37
Pho. 8　池田大原地区　１号濠完掘状況……37
Pho. 9　池田大原地区　２号濠土層断面……37
Pho. 10　池田大原地区　２号濠および不明遺構
　　完掘状況……38
Pho. 11　池田大原地区　作業風景……38
Pho. 12　不條地区　ＳＸ２遺物出土状況……38
Pho. 13　不條地区　作業風景……38

Ⅰ章　遺跡の立地する環境

1．地理的環境

「…又南に一海渡る千余里，名付けて瀚海と曰い，一大國に至る。官は卑狗といい，副官は卑奴母離と曰う。方三百里可，竹林や叢林を多くし，三千許の家が有る。差に田地を有し，田を耕しても猶食に不足し，同じように船に乗りて南北に市糴している…」

このように「魏志倭人伝」に記される壱岐は対馬同様，大陸と日本を結ぶ飛び石のように玄界灘に浮かぶ島である。南北約17km，東西約15kmのやや南北に長い本島のほか多くの属島からなり，総面積約138.8km²，人口は約３万２千人を数える。本土との交通手段は海上交通が主で，福岡県博多と佐賀県唐津へ船便が結ばれている。長崎県には直通の交通手段が空路しかないため，行政区分としては長崎県に属するものの文化的，経済的には福岡県とのつながりが深い。

島全体の地形は比較的平坦な溶岩台地で，最高峰の岳の辻岳でも標高213mにすぎない。これは『魏志倭人伝』で「…居る所絶島…土地は山険しく，深林多く，道路は禽鹿の径の如し…良田無く…」と記される対馬とは対照的である。「魏志倭人伝」では「…田を耕しても猶食に不足し…」と記されるが，島南東部の深江田原は県内第一の沖積平野で，今日では圃場整備も進み，有数の穀物地帯となっている。原の辻遺跡はこの中心部に位置し，南から延びた舌状の台地（標高18m）を中心に約100haの規模を誇る。また遺跡北部には島内最長の幡鉾川（約8.8km）が流れ，東へ約1.5km進むとやがて内海湾に注ぎ込む。この幡鉾川では圃場整備に伴う河岸整備が行われる近年まで高潮の遡上がみられ，また遺跡より約２km上流には「船橋」という地名が残っていることから，太古より水上交通として機能していたことが想像される。

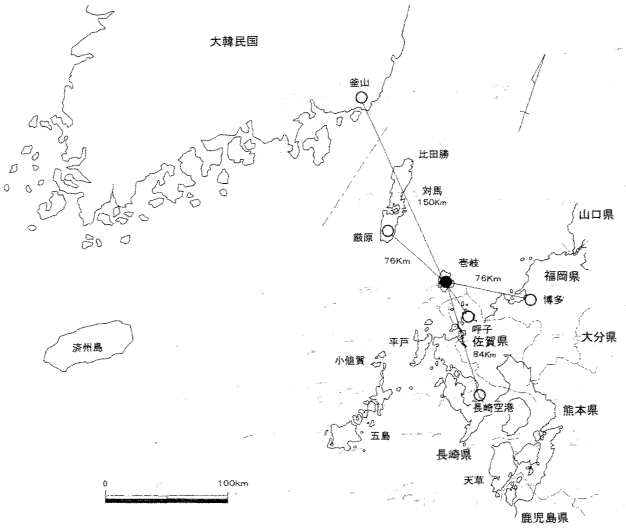
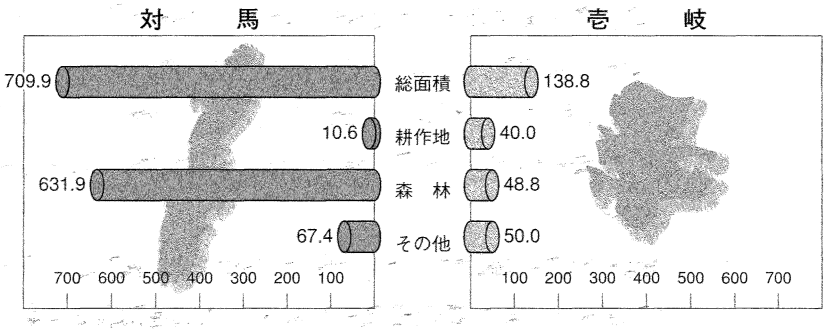


Fig. 1　壱岐島の位置図



単位はkm²	その他	森　林	耕　地	総面積
対　馬	67.4	631.9	10.6	709.9
壱　岐	50	48.8	40	138.8

Tab. 1　壱岐・対馬面積比率表

2．歴史的環境

壱岐における旧石器時代の遺物は名切遺跡，松崎遺跡，鶴田遺跡など島内の数カ所で確認されている。また原の辻遺跡からは昭和50年（1975）に台形石器・ナイフ型石器・細石器・細石核などが広範囲にわたり出土した。特に台形石器は姶良火山灰（AT）降灰直後の石器組成の重要な器種として「原の辻型台形石器」と呼称されることとなり，時期は剥片尖頭器との共伴からナイフ形石器文化中期後半におくことができる。また平成３年（1991）には遺跡丘陵西側の水田下180cmの腐植土層からナウマン象の臼歯が出土している。ナウマン象と旧石器の共伴は確認されていないが，絶滅した動物化石とそれを狩猟した人類の遺物が同時に出土した例は全国でも長野県野尻湖遺跡などがあるにすぎず，原の辻遺跡はその例に追加される可能性もある。

壱岐における縄文時代の遺跡は鎌崎遺跡，名切遺跡，松崎遺跡などで壱岐島西側に集中し，しかも海岸部に立地して干潮時に遺跡が現れる，いわゆる潮間帯遺跡が多いことが特徴としてあげられる。鎌崎遺跡は表面採集ではあるが良好な石銛やスクレーパーなど特徴ある石器が確認されており，特に全体を直角三角形状に整形して底辺にゆるい弧状の刃部を作り出すスクレーパーは「鎌崎型スクレーパー」と呼ばれ，九州北西沿岸部のみならず朝鮮半島南岸の東三洞貝塚でも出土している。

壱岐における初めての縄文遺跡発掘の事例となった名切遺跡では，昭和58年（1983）に長崎県教育委員会によって発掘調査が行われた。この遺跡からは中期から晩期に造られた貯蔵穴30基が確認され，底面からカシの実など堅果類が，上面からは人頭大の礫や石皿が出土している。形状の多くが円形筒型で，なかにはフラスコ状のものもある。湧水が見られる遺跡の立地状況から，貯蔵と灰汁抜きの兼用が考えられよう。礫や石皿は堅果類を竪穴に詰め，それに板材で蓋をした際の重しとしたのだろう。多様な石器も出土しており，漁撈・狩猟・植物採集活動を裏付ける多くの資料を得ることとなった。剥片石器の素材は黒曜石が多いが，壱岐産の黒曜石の他に佐賀県伊万里市腰岳産の良質な黒曜石もみられる。

また松崎遺跡では幾何学的細線刻文をもち，滑石粉末を混入した縄文前期の土器が確認されている。この種のものは韓半島の櫛目文土器との関連が指摘されている。

このように確認された石器や貯蔵穴などから，これらの縄文時代の遺跡が生活の糧を海にのみ求めるのではなく，多様な生活を営んでいたことがうかがえる。また海上交流の活発さも物語っており，対馬海峡を舞台にした九州北部と朝鮮半島を結ぶ海上交流が，後の稲作伝播の経路となったことを想起させる。

弥生時代の遺跡は，壱岐島内で約60カ所が周知されているが，なかでも遺跡の規模，出土品の質量から突出するのが原の辻遺跡である。この遺跡は大正時代に発見され，その後の河川改修工事や耕地整理に伴って大量の土器や中国製銅鏡などが，また東亜考古学会による学術調査では貨泉が出土するなどして学術的に重要な遺跡として認知されるようになった。今日までの調査で遺跡面積100ha，３重の環濠を備え，石積みの船着き場などを有する大規模な集落であることが判明している。また『魏志倭人伝』に記載された記事と国名が一致する唯一の遺跡と特定され，平成12年には国特別史跡に指定されている。

車出遺跡は幡鉾川の約５km西側の上流にある山間部の狭い平野に所在する。この遺跡からは方格規

矩鏡や貨泉，卜骨などの祭祀に関わる遺物が出土している。この遺跡の側には後に旧式内社の壱岐一の宮と称される天手長男神社が鉢形山山頂に営まれるため，この地が太古から祭祀的な空間として機能していたことが想像される。

カラカミ遺跡は標高70mを超える丘陵部に位置する遺跡で，鉄製釣針や鯨骨製アワビオコシなど漁撈に関わる特徴的な遺物が出土することから，農耕文化を如実に示す原の辻遺跡とは古くから対比されてきた。しかし勝本町教育委員会が実施した発掘調査（昭和57～60）では銅鏃や卜骨などが出土し，また環濠を備えている点などから原の辻遺跡との関連も指摘されるようになった。朝鮮半島から舶載された瓦質土器や滑石混入土器も確認されており，海を糧に生活したこの集落の性格がうかがえる。

車出遺跡，カラカミ遺跡両者とも遺跡の存続期間は原の辻遺跡と趨勢を同じくしており興味深い。あるいはこのいずれかが原の辻遺跡とは役割を分かち合った，すなわち呪術・祭祀のためのみに営まれた集落で，「卑狗」が統べる原の辻遺跡に対して「卑奴母離」が治める祭祀的な空間であったかと思われるが，これは想像の域を出ない。

祭祀的な遺跡としては，天ケ原セジョウ神遺跡をあげることができる。この遺跡は壱岐島の北端部に位置し，昭和36年（1961），護岸工事の際に３本の中広銅矛が出土している。おそらくは朝鮮半島や大陸との境界を意識したもので，外的の侵攻を防ぐ目的と，航海の安全を祈る目的で埋納されたものと思われる。

現在確認されている壱岐島内の古墳は265基にのぼるが，編年的に４世紀までを遡るものはない。現在周知されている古墳では大塚山古墳が最も古く，５世紀後半頃に比定されているが，大部分が６世紀から７世紀に築造されたものである。形状は円墳が主で，これら古墳のうち90余基が壱岐島のほぼ中央部に集中している。これは一地方の古墳群としては突出した規模と内容であり，しかも各古墳の間には同じ設計図が使用されたと思われるほどの類似性が見られることは大きな特徴といえる。

鬼の窟古墳は県下最大の円墳で，石室は玄室・中室・前室からなり17mと長い。この古墳の西に位置する笹塚古墳も石室は15mと長く，その構造や構築方法は鬼の窟古墳と同じであり，その強い類似性は特筆される。県下最大の前方後円墳である双六古墳もこの古墳群にある。全長91m，玄室・前室・羨道からなる石室は全長11mをはかり，自然地形を利用して版築した２段築成である。調査により石室内から金製品・金銅製品・青銅製品・鉄製品・ガラス玉や須恵器・土師器・中国二彩陶器（北斉）などの遺物が確認されている。

古代，律令体制下では壱岐は対馬同様に一国（下国）として扱われ，壱岐・石田の２郡が置かれた。従って国府が置かれ，やがて国分寺が設置されるのだが，壱岐では新たに建設する経済基盤がなかったのか，壱岐直の氏寺を国分寺に転用した旨が『延喜式』（玄蕃寮）に書かれている。その記録には「壱岐嶋直氏寺為島分寺。置僧五口」とあり，僧二十口が置かれた諸国の国分寺に比べて規模が小さく，そのため嶋分寺と呼ばれることになる。この嶋分寺の調査では平城様式の軒丸瓦と軒平瓦が少量確認されている。平城宮では第Ⅰ期（和銅元年～養老五年）に使用され，同范資料では大和大安寺などで出土している。このことは壱岐直が朝廷から范木を下賜されたことを想像させる。壱岐直は宮城と同じ瓦で氏寺の甍を飾ったのだろうか。

古代の遺跡としては串山ミルメ浦遺跡をあげることができる。ここでは卜占に使用された海亀の甲

羅や，大量の鮑殻が出土している。亀卜は壱岐島内の弥生時代遺跡では確認されていないが，卜骨から引き継がれた卜占の伝統が感じられる。また鮑殻はここが調の加工場であったことを想像させる。

なぜ壱岐に多くの巨石古墳が存在するのか，その理由は古代の様子から想像することができる。まず壱岐には卜占の伝統が弥生時代から受け継がれており，やがて律令時代には卜部として朝廷における重要な職掌を担うに至ったことである。また壱岐は太古より海を生活の糧としているため海上交易に精通した海人族としての性格も併せ持っている。6世紀におこった朝廷と筑紫国磐井との戦いでは，朝鮮半島西岸，新羅付近の制海権を掌握していた磐井勢力を伊吉島造が駆逐したと『旧事記』の国造本紀に記録されている。朝鮮半島と朝廷との仲介をなしうる壱岐の勢力に対して朝廷から何らかの恩賞があったはずで，おそらくはそれを背景に古墳造営が行われたと思われる。

国境の島としての過酷な境遇は古代より壱岐に大きな禍根をもたらした。白村江の戦い（663）では多くの壱岐の民が徴発されて海の藻屑と消えたであろうし，寛仁三年（1019）の刀伊の入寇では壱岐島守藤原理忠をはじめ多くの住民が殺害または捕囚された。

鎌倉時代には文永・弘安の役，すなわち蒙古襲来（元寇）を受ける。鎌倉武士団の活躍や神風などが叙情詩的に語られる反面，多くの住民が殺戮された。

室町時代の壱岐は「三島の倭寇」の1つとして知られる。三島とは壱岐・対馬・松浦（松浦は島ではない）のことで，倭寇とは14世紀から16世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸沿岸で活動した海賊的集団のことである。この背景には南北朝並立から始まる全国的な戦乱がある。もともと農業生産力が低い「三島」は戦乱の影響で生活物資を海外との交易（私貿易）に求めねばならなくなり，しばしば略奪行為を行うようになるのである。鎌倉期を通じて壱岐対馬の守護職であった少貳氏に代わり，この頃壱岐は松浦党五氏（志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留）によって分割統治されたと『海東諸国紀』（1471）にある。この中に「唯多只（湯岳）郷，志佐代官源武，之を主（つかさど）る。戊子年（1468），図書（李朝が授給した銅印）を受け歳遣一，二船を約す。書に一岐守護代官真弓兵部少輔源武と称す」とあり，志佐氏が真弓氏を代官として活発な交易を展開していたことがうかがえ，この交易は三浦の乱（1510）まで続けられたとされる。原の辻遺跡の西約1㎞に位置する覩城は真弓氏の居城と思われ，発掘調査では14世紀頃の高麗象嵌青磁・粉青沙器などが出土している。その後文明四年（1472）に肥前上松浦の岸岳城主である波多氏が壱岐に侵攻する。その際，松浦党五氏の代官衆が覩城で籠城・降服したといわれるが，先述の通り波多氏による壱岐領有後も志佐氏による朝鮮貿易は活発に行われていることから，壱岐の主導権移行はより複雑であったことが想起される。その波多氏も内紛から日高・松浦氏に倒され，平戸を本拠とする松浦氏による壱岐統治が開始される。

松浦氏による壱岐統治が開始された頃，長く続いた戦国時代も終焉を迎える。九州征伐の際，豊臣秀吉のもとへ参陣した松浦氏は領地を安堵される。文禄元年（1592）からはじまる朝鮮出兵（文禄・慶長の役）では，松浦氏は第一軍の小西行長配下に編成され，三千の軍勢で渡海している。またその前年には秀吉の命を受けて勝本城を築城している。『壹岐名勝圖誌』に「夜の中に手々に石を持上がり築けり」とあるように，突貫工事で築城したものと思われる。現在は勝本浦に向かって開かれた外枡形虎口や，その搦手となる虎口などの遺構が残されている。

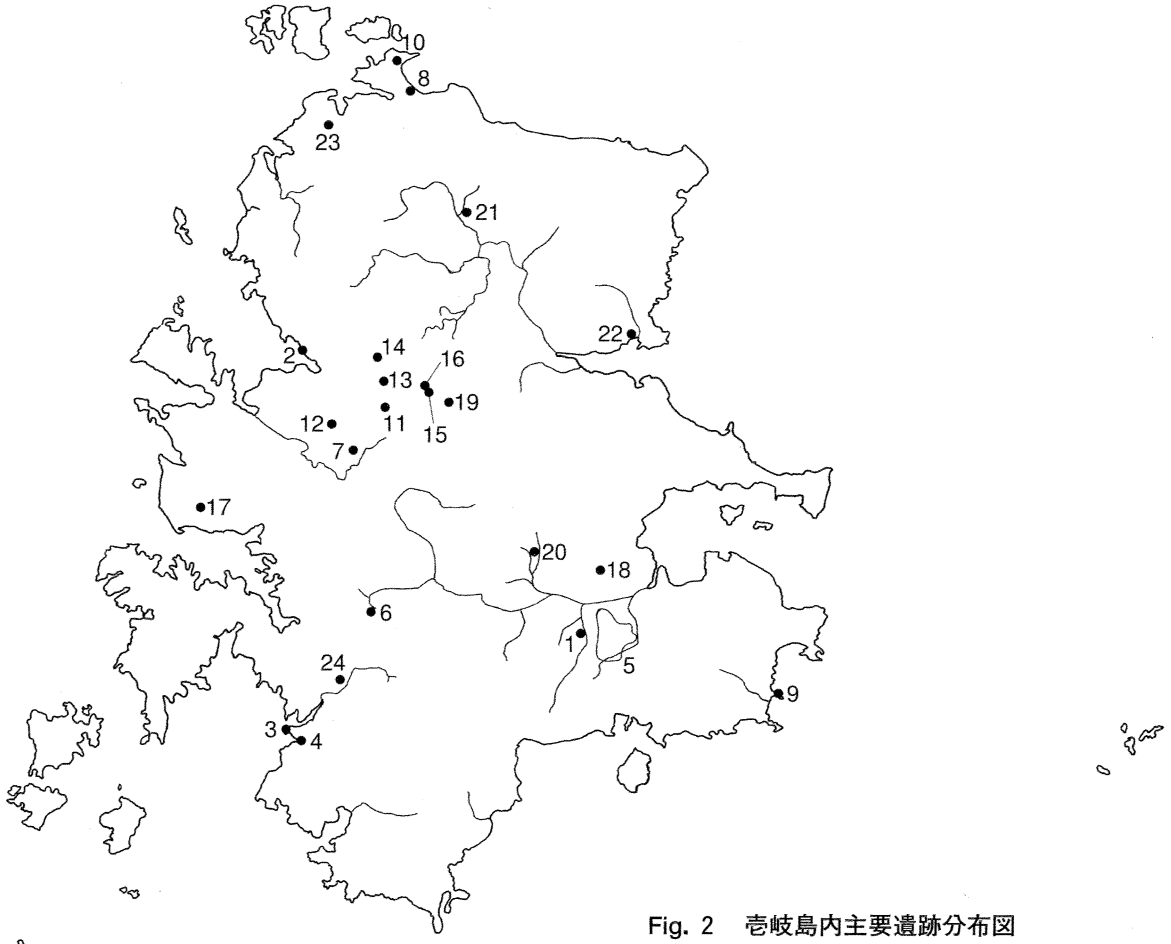


Fig. 2　壱岐島内主要遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	鶴田遺跡	旧石器（石核・フレーク・ナイフ型石器） 良質の漆黒黒曜石　磯道技法との類似が指摘される	長崎県教育委員会（1998）
2	松崎遺跡	縄文土器・縄文石器・貝輪 干潮帯遺跡　縄文早期や縄文時代平行期の韓半島新石器時代土器が出土する	勝本町教育委員会（2003）
3	鎌崎遺跡	縄文土器・弥生土器・石器 干潮帯遺跡　鎌崎型スクレーパーは韓半島南岸でも出土	横山順・田中良之（1979）
4	名切遺跡	縄文土器・石器 干潮帯遺跡　貯蔵穴30基を確認	長崎県教育委員会（1985）
5	原の辻遺跡	弥生土器・石器・青銅器・鉄器 一支国の中心集落　韓半島系・大陸系の遺物が大量に出土	長崎県教育委員会
6	車出遺跡	弥生土器・銅鏡片・ガラス玉 丹塗磨研土器が多く出土	長崎県・郷ノ浦町教育委員会（1998）
7	カラカミ遺跡	弥生土器・骨格器・卜骨 海人的性格をもつが環濠も備える	勝本町教育委員会（1985.1988）
8	天ケ原セジョウ神遺跡	銅矛 中広銅矛が３本出土	勝本町教育委員会（1985）
9	大久保遺跡	弥生土器・須恵器 石棺墓　壮年男性の人骨が出土	長崎県教育委員会（1988）
10	串山ミルメ浦遺跡	土師器・須恵器・金属器・亀卜・骨格器 砂丘上の生産遺跡で甑把手と鮑殻が出土していることから干し鮑（調か？）生産が中心と推測	勝本町教育委員会（1985.1989.1990）
11	双六古墳	鉄製品･金銅製品･ガラス玉･須恵器･土師器･唐二彩 前方後円墳（全長91㍍後円部直径43㍍高さ10.6㍍前方部幅36㍍高さ５㍍）横穴式石室（全長11㍍玄室・前室）	勝本町教育委員会（2001）
12	対馬塚古墳	— 前方後円墳（全長約65㍍後円部直径約36㍍前方部幅25㍍）横穴式石室（全長9.4㍍玄室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
13	笹塚古墳	須恵器・土師器・陶質土器・金銅製馬具 円墳（直径38㍍高さ10㍍方墳の可能性も）横穴式石室（14.8㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
14	掛木古墳	須恵器・土師器・銅鏡片・金環・鉄製品 円墳（直径約30㍍高さ７㍍）横穴式石室（全長13.6㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
15	鬼の窟古墳	須恵器・陶質土器（新羅系） 円墳（直径45㍍高さ13㍍）横穴式石室（全長16.5㍍玄室・中室・前室）	芦辺町教育委員会（1990）
16	兵瀬古墳	— 円墳（直径34㍍高さ８㍍）横穴式石室（全長12㍍玄室・中室・前室）	松永泰彦（1982）
17	鬼屋窪古墳	須恵器 墳丘消失　石室も半壊しており開口方向など不明　袖石に船の線刻あり	副島康司・木村幾太郎（1981）
18	大塚山古墳	須恵器・鉄器 円墳（直径14㍍高さ２㍍）竪穴系横口石室（全長3.96㍍）	芦辺町教育委員会（1987）
19	壱岐嶋分寺跡	瓦・須恵器・土師器・輸入陶磁器 奈良平城宮6284Ａ型式と同范の軒丸・軒片瓦が出土	芦辺町教育委員会（1991～1994）
20	覩城跡	輸入陶磁器 松浦党五氏の佐志氏代官真弓氏の居城　朝鮮貿易の拠点	長崎県教育委員会（1997）
21	文永の役新城古戦場	— 文永の役における戦場　壱岐守護代平景隆らが戦死	—
22	弘安の役瀬戸浦古戦場	— 弘安の役における戦場　壱岐守護代少貳資時らが戦死	—
23	勝本城跡	— 朝鮮出兵時に豊臣秀吉の命で松浦鎮信が築城　兵站中継基地	—
24	亀丘城跡	— 波多宗無が築城した城郭　近世からの壱岐の中枢部	—

Tab. 2　壱岐島内遺跡・史跡一覧表

Ⅱ章　調査に至る経緯

1．原の辻遺跡における調査経緯

原の辻遺跡は大正年間に松本友雄によって発見された。その後の河川工事や耕地整理の際に大量の土器や中国製鏡などが確認され，遺跡の重要性が認識されるようになった。昭和26～36年(1951～1961)には京都・九州大学を中心とする東亜考古学会によって学術調査が行われた。初の本格的な発掘が行われたこの調査では各種鉄製品や貨泉，あるいは韓半島系や楽浪系土器が出土したことから大陸との関連が強い遺跡として学界で注目を集めた。反面，地元における遺跡への関心は低く，やがて遺跡の位置する丘陵周辺では畑地から水田への転換が進められた結果，遺跡はかなりの損壊を受けた。昭和49年(1974)には石田大原地区において，水田化改良工事にともなう発掘調査によって墓域が確認された。この墓域は弥生時代前期末から中期を中心とする箱式石棺墓および甕棺墓から構成されており，区画溝を伴う本格的な墓域として注目された。この調査を受けて昭和50～52年度(1975～1977)に範囲確認調査が実施され，遺跡の範囲が舌状台地の南側まで広がることが確認された。平成に入ると幡鉾川流域総合整備事業にともない，舌状台地周辺の低地部を中心に広範囲な発掘調査が行われた。これにより原の辻遺跡が台地周辺の低地部に幾重にも環濠を巡らす，遺跡規模約100haにもおよぶ大規模環濠集落であることが判明した。平成７年（1995）以降は集落構造の把握を目的とした範囲確認調査が実施された。これまでの調査により環濠の外側に墓域が確認され，丘陵上の調査においては多数の竪穴住居跡とともに，丘陵の最高地から掘立柱建物を中心とする祭儀場跡が発見された。また低地部の調査も継続して行われ，複雑に巡る環濠の様相が明らかになるとともに，各年度の調査で確認された環濠間の繋がりについて検討可能な基礎資料を得ることとなった。

Fig. 3　調査地区位置図（1/12,000）

また旧芦辺町教育委員会によって平成11年（1999）から，また旧石田町教育委員会によって平成13年（2001）から遺跡整備にともなう発掘調査が行われている。旧芦辺町は丘陵部を中心に調査を行い，

多数の住居跡を確認するとともに権（秤の錘）や青銅製ヤリガンナ，中広銅矛や鋳型などの重要な遺物を確認している。また旧石田町は大原・大川地区の墓域を中心に調査を行い，甕棺墓22基，多紐細文鏡や細形銅剣などを確認している。この遺跡整備にともなう発掘調査は壱岐４町（他に郷ノ浦町と勝本町）の合併（平成16年３月）により誕生した壱岐市教育委員会に引き継がれている。

２．本事業調査の経緯

主要地方道勝本石田線は遺跡の丘陵部西側を南北に走るが，幅員が狭く朽化も進んでいるため，改良工事に向けての協議が平成５年度（1993）から行われた。改良工事に当たっては既存の県道を拡幅する案も検討されたが，丘陵部では重要な遺構が出土する可能性もあり，また将来的に遺跡整備を行う際の支障となる恐れがあることから，丘陵西側低地部に新たに取り付けることとなった。

その間，遺跡の発掘調査では船着き場跡などの重要遺構が次々に発見され，平成９年（1997）には国史跡となり，その３年後の平成12年（2000）には異例の早さで国特別史跡に指定されるに至った。

県道改良工事に伴う調査は平成14年度（2002）に着手し，2,400㎡の調査が行われた。当初3,200㎡の予定であったが，水利権が解決していないため調査できない区域が約600㎡存在している。この区域については工事着工直前に調査を行うことで壱岐地方局建設部建設課道路班と合意している。このＨ14県道調査〔**福田・小玉2004**〕では遺跡西側低地部が調査され，環濠１条・河道２条・溝１条などが確認されている。続くＨ15県道調査〔**林2005**〕においても同じく遺跡西側低地部3,100㎡の調査が実施され，河道３条，溝状遺構９条，護岸遺構１基，樹皮敷遺構１基，祭祀土坑１基，水田遺構（畦畔）１基，集石遺構１基，小児甕棺墓１基などが確認されている。Ｈ16県道調査〔**林2006**〕では原ノ久保Ａ地区の調査を行い，溝状遺構１条，住居跡１基，不明遺構１基，埋甕遺構１基，ピット群などが確認されている。Ｈ17県道調査〔**林2006**〕では安国寺Ａ地区の調査を行い，河道跡１条などを確認している。

番号	本文略称	報告書名 サブタイトル	タイトル	発行機関 発行年
1	Ｈ８河川	原の辻遺跡調査事務所報告書　第４集 幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書Ⅲ	原の辻遺跡・鶴田遺跡	長崎県教育委員会 1998
2	Ｈ９国補	原の辻遺跡調査事務所報告書　第11集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅰ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 1999
3	Ｈ10農道	原の辻遺跡調査事務所報告書　第15集 幡鉾川流域総合整備計画（県営圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書Ⅷ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 1999
4	Ｈ10特定	原の辻遺跡調査事務所報告書　第16集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅰ（船着き場付近水路等状況調査）	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 1999
5	Ｈ11国補	原の辻遺跡調査事務所報告書　第18集 原の辻遺跡発掘調査事業に係わる範囲確認調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2000
6	Ｈ11特定	原の辻遺跡調査事務所報告書　第19集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅱ（環濠等状況調査）	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2000
7	Ｈ12特定	原の辻遺跡調査事務所報告書　第21集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅲ（環濠等状況調査２）	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2001
8	Ｈ12国補	原の辻遺跡調査事務所報告書　第22集 原の辻遺跡発掘調査事業に係わる範囲確認調査報告書Ⅲ	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2001
9	Ｈ13特定	原の辻遺跡調査事務所報告書　第24集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書Ⅳ（環濠等状況調査３）	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2002
10	Ｈ14国補	原の辻遺跡調査事務所報告書　第26集 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2003
11	Ｈ14県道	原の辻遺跡調査事務所報告書　第27集 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書①	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2004
12	Ｈ12雇用	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書　第２集 長崎県緊急雇用対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	原の辻遺跡	原の辻遺跡保存等協議会 2001
13	Ｈ15県道	原の辻遺跡調査事務所報告書　第29集 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書②	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2005
14	Ｈ16県道	原の辻遺跡調査事務所報告書　第32集 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書③	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2006
15	Ｈ17国補	原の辻遺跡調査事務所報告書　第33集 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2006
16	Ｈ17県道	原の辻遺跡調査事務所報告書　第34集 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書④	原の辻遺跡	長崎県教育委員会 2006

Tab. 3　調査区・報告書対応表

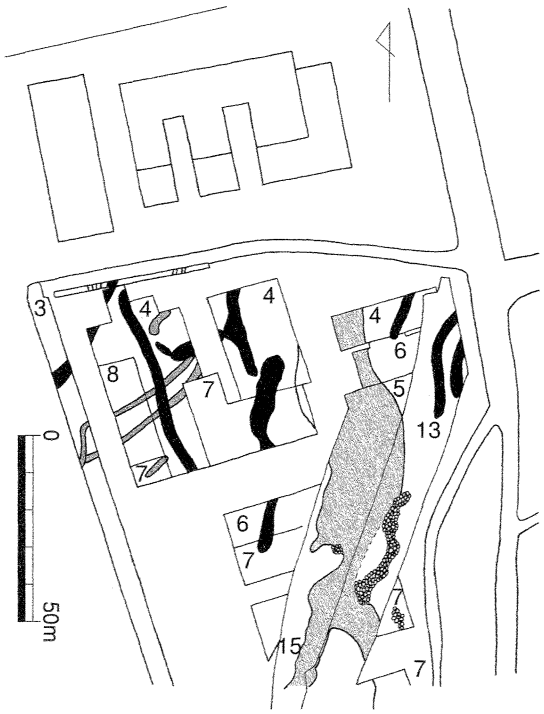


Fig. 4　不條地区遺構配置図（１/2,000）

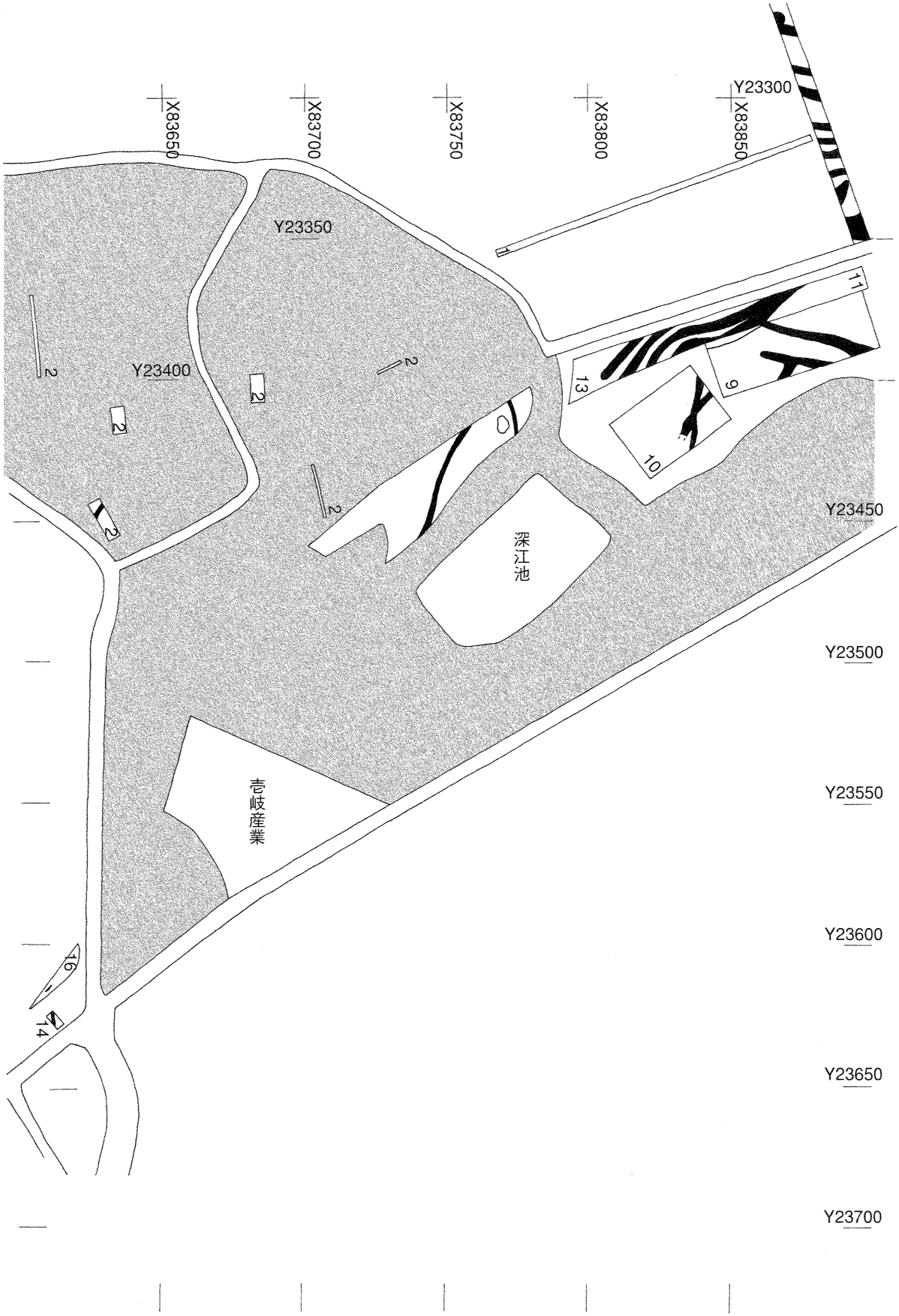


Fig. 5　池田大原および原ノ久保地区遺構配置図（1/2,000）

Ⅲ章　調　　査

1．不條地区

(1) 調査概要

不條地区は県道工事に付随する側溝埋設工事における工事立会である。この際に前期を主体とする遺物が出土したため調査を行った。調査期間は平成19年１月30日から同年２月５日の５日間を要した。調査面積は側溝埋設予定地のうち92㎡である。

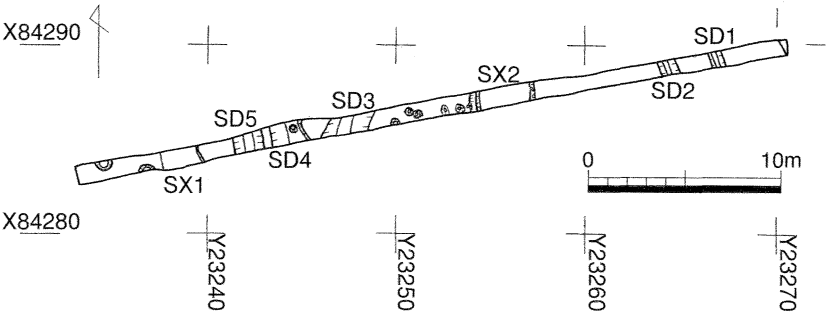


Fig. 6　不條地区全体図（1/400）

この不條地区ではH10特定調査〔**杉原1999**〕，H12特定調査〔**杉原2001**〕，H12国補調査〔**安楽2001**〕など数次にわたる発掘調査が行われている。これら調査では環濠８条，溝５条，河川跡１条，土坑などの遺構が確認されている。

今回の調査では濠を２条（ＳＤ３・ＳＤ５），溝を３条（ＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ４），土坑を２基（ＳＸ１・ＳＸ２），ピットを12基それぞれ確認した。これら遺構と過去の調査で確認された遺構のつながりを想定すると，ＳＤ３とH10特定調査における４号濠が繋がると思われる。それ以外の遺構については繋がりを想定できなかった。

(2) 基本層序

不條地区の基本層序は４層からなる。１層は造成土である。２層の色調は褐灰色（12YR6/1）で黄褐色の鉄分を混入する。３層の色調は暗灰色で，砂を混入する粘土層である。４層の色調は暗褐色（10YR3/4）で，いわゆる基盤（地山）層である。

(3) 遺構と遺物

遺構は検出規模および充填土（堆積状況）の説明を行い，その後に遺構の検討を若干行っている。また遺物についてはその特徴を説明し，時期判断については『原の辻遺跡総集編Ⅰ』「Ⅴ遺物」〔**福田・中尾2005**〕を参照した。遺物の詳細な観察は **Tab. 5** ～ **6** および **Tab. 9** を参照されたい。

①濠

ＳＤ３

幅2.4m，深さ0.7mを測る。断面はU字を呈する。遺構充填土は３層からなる。上層（ＳＤ３①）の色調は褐灰色（10YR5/1）でマンガンが多く砂質に富む。中層（ＳＤ３②）の色調は褐灰色（10YR5/1）で粗い粘土層である。層位の下部に炭化物が堆積する。下層（ＳＤ３③）の色調は褐灰色（10YR4/1）で粘土層である。H10特定調査〔**杉原1999**〕における４号濠と繋がる遺構で，南西－北東の

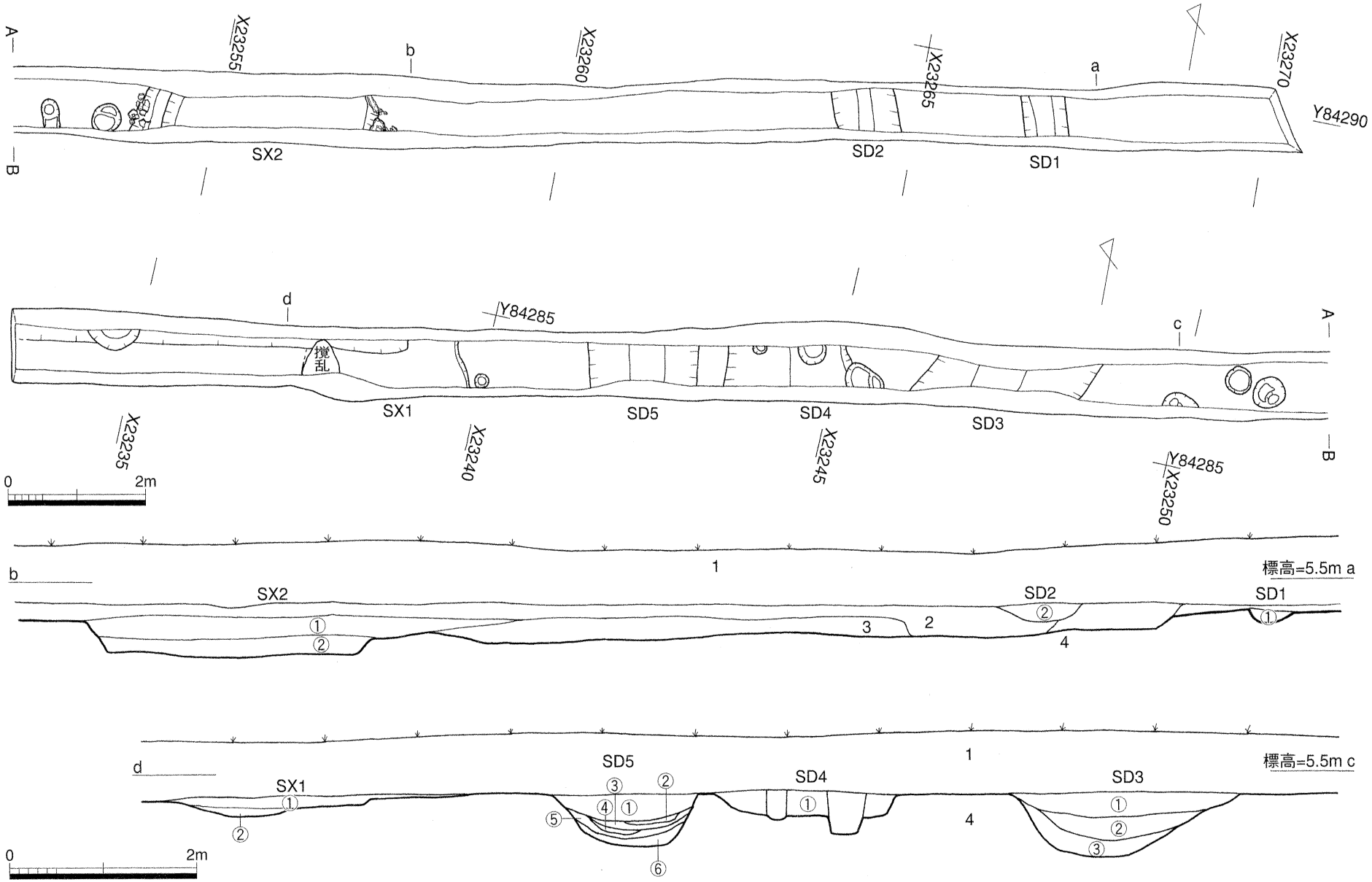


Fig. 7　不條地区遺構図（1/80）および土層断面図（1/60）

軸をとる。このH10特定４号濠の出土遺物には弥生時代後期から古墳時代初頭の資料が多いが，今回確認したＳＤ３の出土遺物に弥生時代後期の資料は確認されなかった。

次にＳＤ３の出土遺物を説明する。**1**～**4**は甕の口縁破片である。**1**～**3**は口縁部の断面が「鋤先」形となり，口縁部下に１条の突帯を施している。口縁部内側のつまみ出しが明瞭となっている。**4**は断面が「く」の字形になり，内面には器壁のケズリ痕がわずかに残る。**5**は甕の底部である。断面は平底を呈する。内面にスス痕のような褐色の付着物が認められる。**1**～**3**は弥生時代中期Ⅴ期（須玖Ⅱ式新段階），**4**は古墳Ⅲ期に相当する。

ＳＤ５

幅1.5m，深さ5.5mを測る。断面は逆台形を呈する。遺構充填土は６層に細分されるが，大まかには３段階の堆積と思われる。上層（ＳＤ５①～②）の色調は褐色（10YR4/6）である。中層（ＳＤ５②～③）の色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）で，層位の下部に炭化物が堆積する。下層（ＳＤ５④～⑤）の色調は褐灰色（10YR4/1）で，層位の中間に炭化物が堆積する。

次にＳＤ５の出土遺物を説明する。**6**～**7**は甕の口縁部である。口縁部の断面は**6**が「コ」の字形で，**7**は「鋤先」形を呈する。**7**は口縁部下に１条の突帯を施し，口縁内側のつまみ出しも明瞭である。**8**は短頸壺か。**9**は広口壺で，口縁内側につまみ出しが付く。**10**は素口縁の広口壺である。**11**は甕の底部である。**12**は口縁部に丸い粘土帯を口縁に貼り付けた無文土器（朝鮮半島系土器）の甕である。**13**は敲石で，全面に敲き痕が残る。**6**は弥生時代中期Ⅲ期（須玖Ⅰ式新段階），**7**は中期Ⅴ期（須玖Ⅱ式新段階），**8**～**10**は中期Ⅳ～Ⅴ期（須玖Ⅱ式）に相当すると思われる。

②溝状遺構

ＳＤ１

幅0.5m，深さ0.15mを測る。断面はＵ字を呈する。遺構充填土は１層で，色調は灰色（N4/）である。出土する遺物は少なく，全体に摩滅を受けたものが多い。耕作土（表土層）の直下から検出され，遺構充填土に含まれる遺物も摩滅したものが多いことなどから，弥生時代の遺構ではないと思われる。弥生時代以外の遺物が含まれていないため時期判断が困難だが，おそらく古代から中世にかけての用排水路と思われる。

次にＳＤ１の出土遺物を説明する。**14**は甕の口縁部で，口縁内側のつまみ出しが明瞭である。**15**は素口縁広口壺の口縁部である。外面に丹塗りが施される。**16**は袋状口縁壺の口縁部である。袋状の口縁部には稜線が明瞭に観察される。口縁上面には「十字」の線刻が施されている。

ＳＤ２

幅１m，深さ0.2mを測る。断面はＵ字を呈する。遺構充填土は１層で，色調は灰色（N4/）である。遺物を多く含むが，摩滅したものが多い。ＳＤ１同様に，耕作土直下から検出され，摩滅した遺物を多く含むことなどから，弥生時代以降の遺構と思われる。

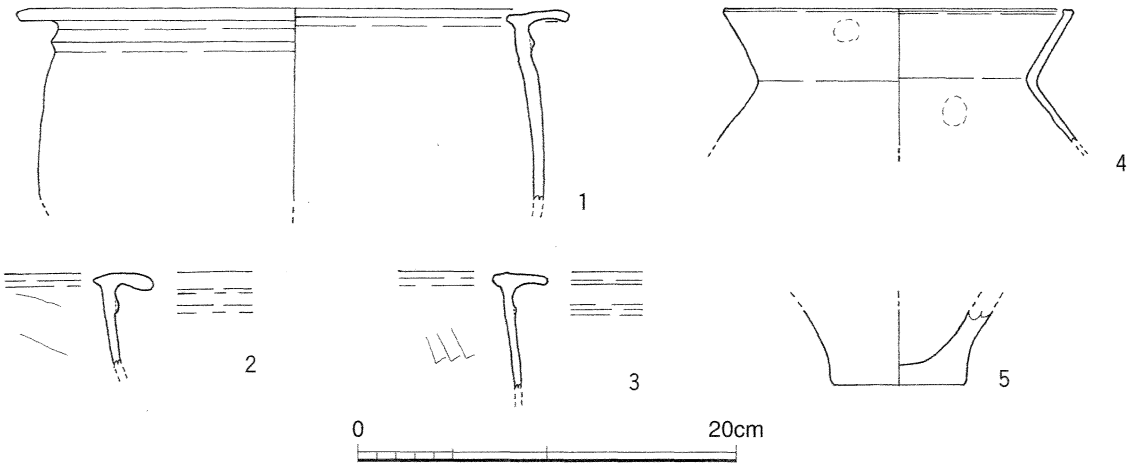


Fig. 8　不條地区ＳＤ３出土遺物図（１／４）

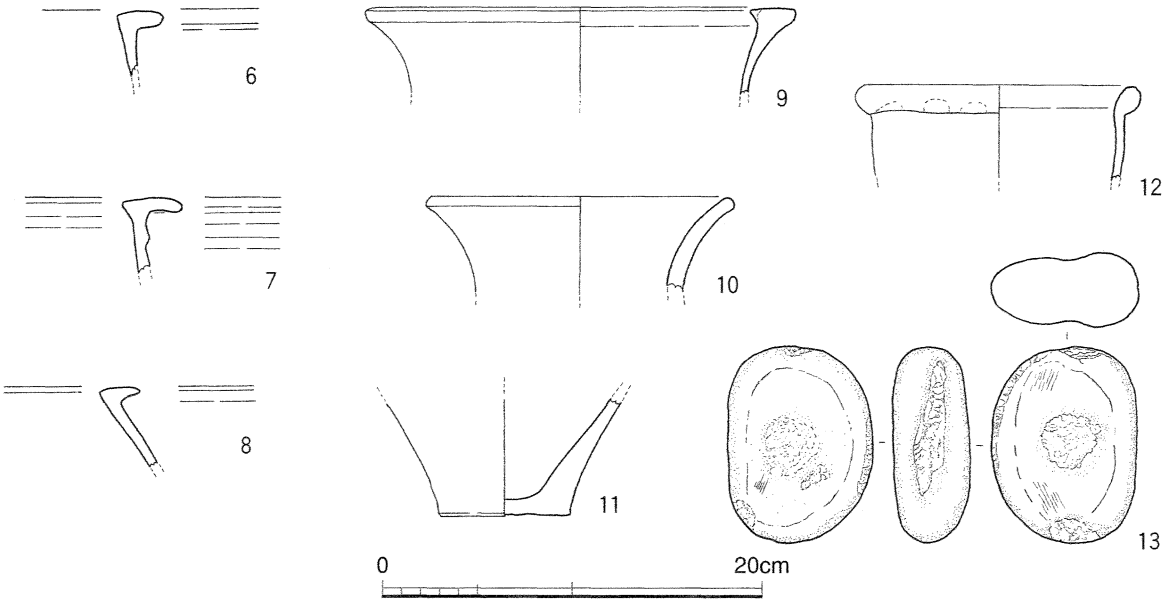


Fig. 9　不條地区ＳＤ５出土遺物図（１／４）

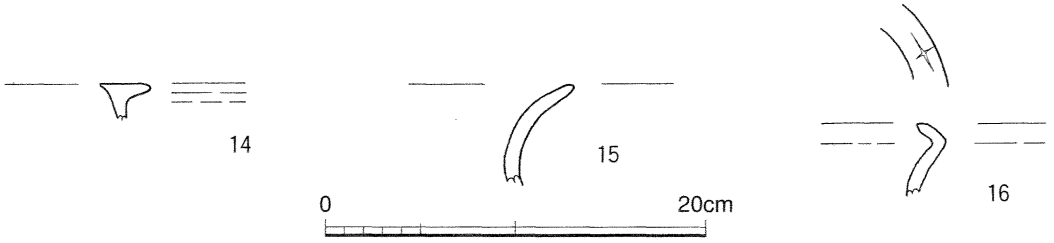


Fig. 10　不條地区ＳＤ１出土遺物図（１／４）

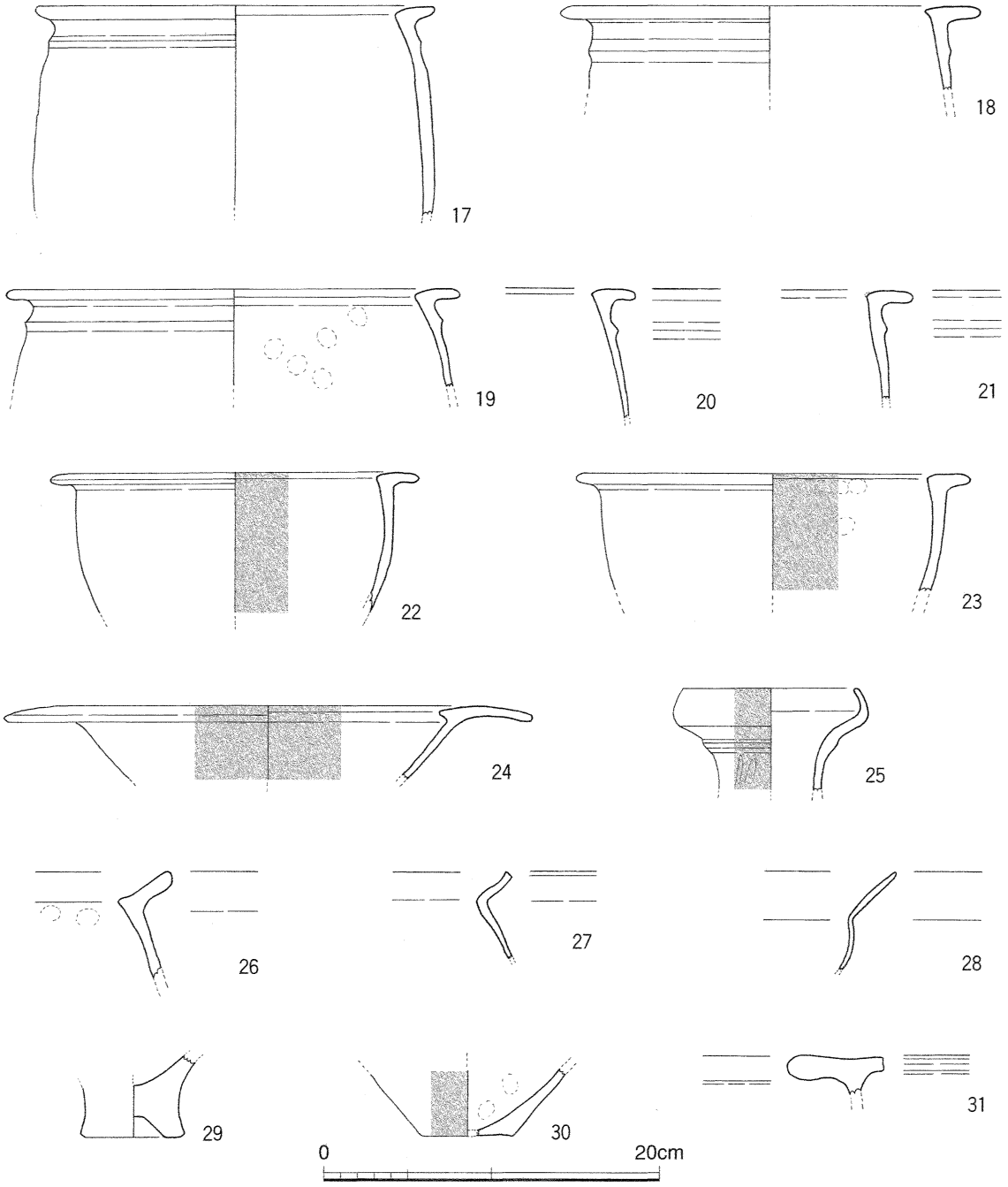


Fig. 11　不條地区ＳＤ２出土遺物図（１／４）

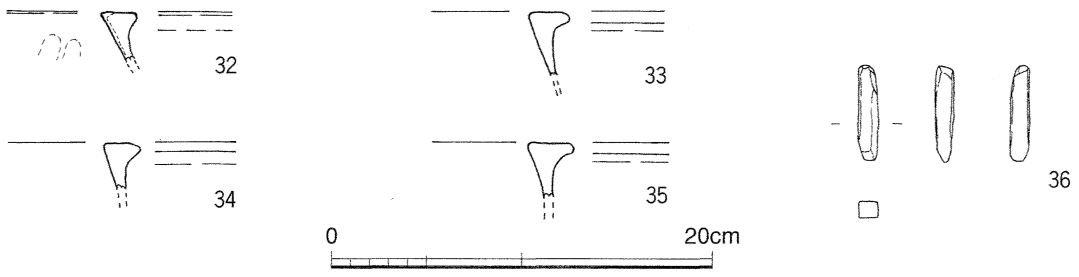


Fig. 12　不條地区ＳＤ４出土遺物図（１／４）

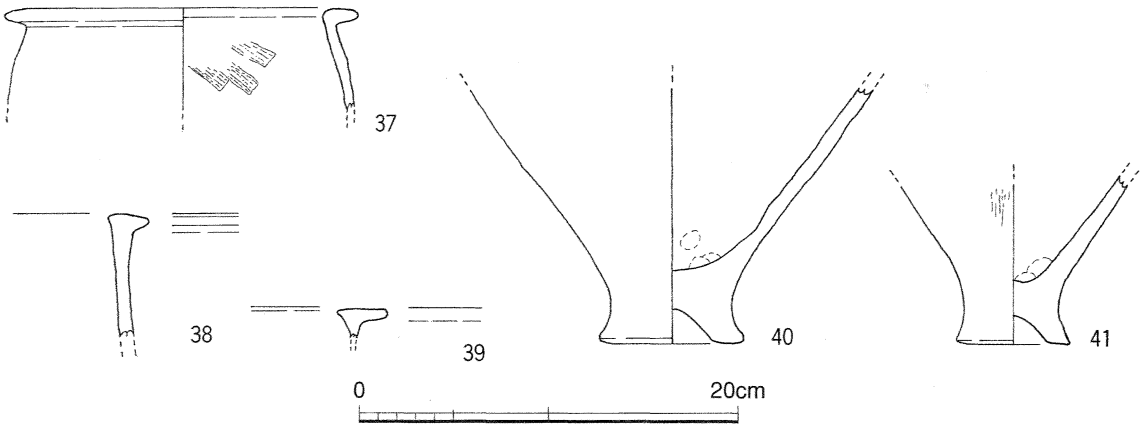


Fig. 13　不條地区ＳＸ１出土遺物図（１/４）

次にＳＤ２の出土遺物を説明する。**17**～**21**は甕の口縁部である。**17**は口縁部の断面が「コ」の字形を呈し，口縁先端が上を向く。口縁部下に１条の突帯を施す。**18**は口縁部の断面が「コ」の字形で先端は水平にのびる。口縁部下に１条の突帯を施す。**19**～**21**は口縁部の断面が「鋤先」形となり，口縁部下に１条の突帯を施す。**22**～**23**は鉢と思われる。口縁部の断面が「鋤先」形となり，口縁部下に突帯は施されない。ともに内面に丹塗りの跡が残る。おそらく外面にも丹が施されていたのだろうが，摩滅により消滅したと思われる。**24**は高坏の口縁部である。口縁部の断面が「鋤先」形になり，口縁部先端が下に垂れる。内外面ともに丹塗りの跡が残る。**25**は袋状口縁壺の口縁部から頸部である。口縁部下に「M字」突帯が施される。頸部には幾重かの「M字」突帯が施されていたと思われるが，欠損の為不明である。外面に丹塗りの跡が残る。**26**は甕の口縁部である。断面が「く」の字形となり，屈曲部の内側はつまみ出しがなされる。**27**は甕の口縁部である。断面が「く」の字形となり，口縁部先端をつまみ上げている。**28**は口縁部の断面が「く」の字形となる鉢である。**29**は甕の底部である。底が大きく凹み，底の裾部がやや広がる。**30**は壺の底部である。平底で外面に丹塗りの跡が残る。**31**は甕棺と思われる大型甕の口縁部である。口唇部の先端が面取りされ，やや凹面となる。口縁部内側のつまみ出しが大きく迫り出す。

ＳＤ４

幅２ｍ，深さ0.5mを測る。充填土は１層（ＳＤ４①層）で，色調は褐灰色（10YR6/1），鉄分や砂質を多く含む。溝として報告しているが，落ち込みである可能性も高い。

次にＳＤ４の出土遺物を説明する。**32**～**35**は甕の口縁部で，口縁部の断面が「三角」形を呈する。36は片刃石斧である。摩滅が激しく，研磨痕は観察できない。

③土坑

ＳＸ１

幅2.5m，深さ0.2mを測る。充填土は２層からなり，１層（ＳＸ１①）の色調は明褐色（7.5YR5/8）である。２層（ＳＸ１②層）の色調は暗褐色（7.5YR3/4）で，炭化物を混入する。遺構の性格は

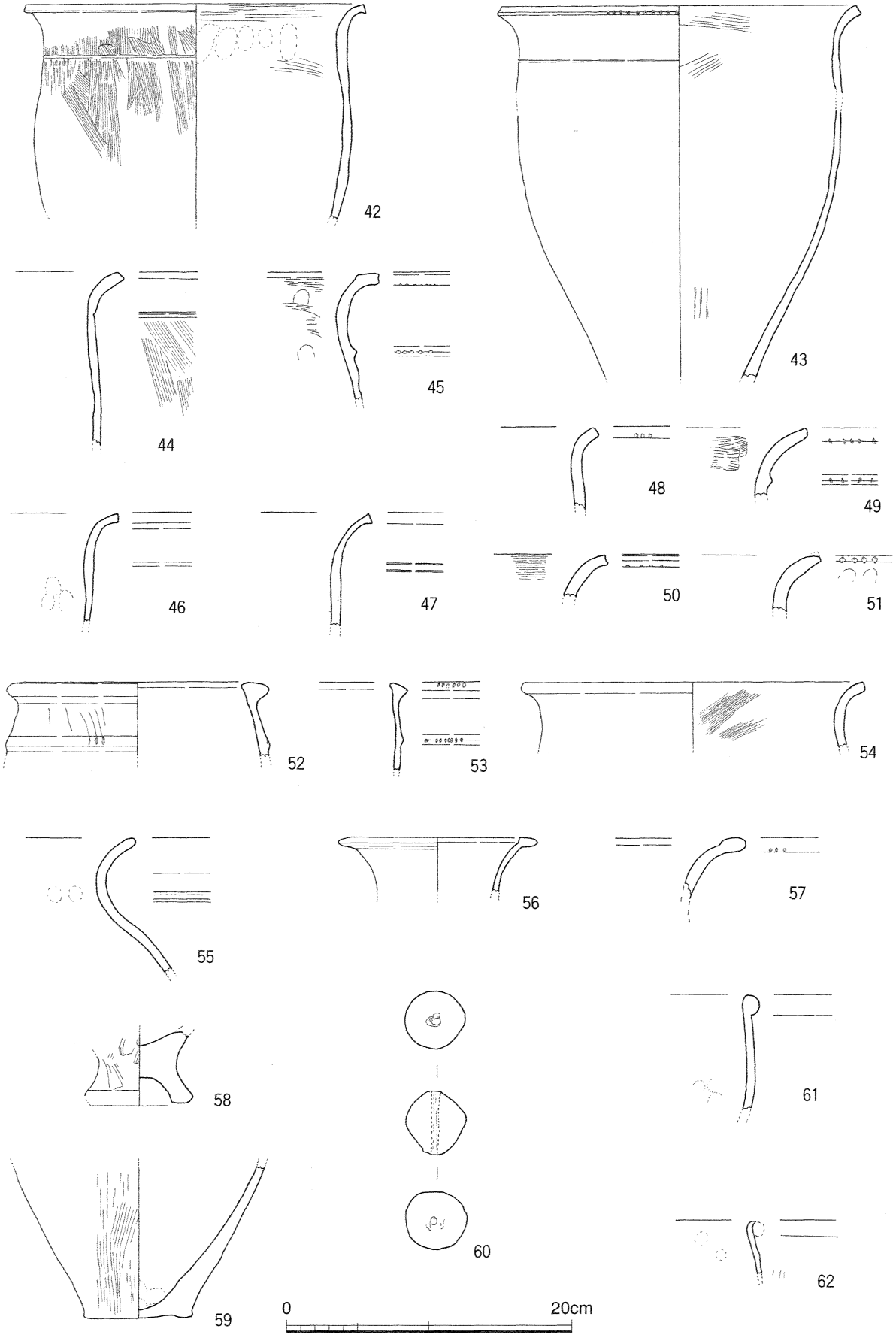


Fig. 14　不條地区ＳＸ２出土遺物図（１／４）

部分的な落ち込みと思われる。

次にＳＸ１の出土遺物を説明する。**37**～**39**は甕の口縁部である。**37**～**38**は口縁部の断面が「コ」の字形である。**39**は口縁部の断面が「鋤先」形である。**40**～**41**は甕の底部で，ともに底が大きく凹み，底の裾が広がる。

ＳＸ２

幅4.5m，深さ0.4mを測る。充填土は２層からなり，１層（ＳＸ２①）の色調は褐色（7.5YR4/3）である。砂粒や炭化物，明褐色土粒などを含む。２層（ＳＸ２②）の色調は灰黄褐色（10YR5/2）で，砂粒を多く含む。遺構の掘り方が明瞭であり，床面がほぼ平坦であること，また頁岩破片を多く含むことなどから住居跡とも思われるが確証はつかめていない。弥生時代前期末から中期初頭の土器と無文土器，頁岩片が供伴する。

次にＳＸ２の出土遺物を説明する。**42**～**50**は甕である。口縁部の断面が「如意」形で，緩やかに口縁部が外反する。**42**は口縁部下に１条の沈線を施す。**43**は口唇部下端に刻目と，口縁部下に１条の沈線を施す。**44**は口縁部下に１条の沈線を施す。**45**は口唇部下端に刻目と，口縁部下に１条の刻目突帯を施す。**46**は口縁部下に１条の沈線を施す。**47**は口縁部下に２条の沈線を施す。**48**は口唇部下端に刻目を施す。**49**は口唇部下端に刻目と，口縁部下に１条の刻目突帯を施す。**50**～**51**は口唇部下端に刻目を施す。**52**～**53**は甕の口縁部である。ともに口縁部の断面が「三角」形となる。**52**は口縁部下に１条の刻目突帯を施す。**53**は口唇部下端に刻目と，口縁部下に１条の刻目突帯を施す。**54**～**57**は壺である。**54**は素口縁の広口壺である。**55**は胴部から口縁部にかけて大きく外反しながら湾曲し，断面が「Ｓ」字形となる。口縁部下に２条の沈線を施す。**56**～**57**は口縁部に粘土を貼り付けた広口壺である。**57**は口唇部下端に刻目が施される。**58**～**59**は甕の底部である。**58**は底部の断面が大きく「逆凹」字形となり，上げ底状になる。底裾部も広がる。**59**は底部の断面が平らである。**60**は土製錘と思われる。断面はおおよそ球体をなし，手の平で捏ねたような形状を見せ，通し孔が空けられている。**61**～**62**は口縁部に断面が丸い粘土帯を貼り付けた無文土器（朝鮮半島系土器）の甕である。**62**は丸粘土が欠損しているが，無文土器の口縁部である。**42**～**51**，**54**は弥生時代前期Ⅰ～Ⅱ期（板付Ⅱｂ式段階），**52**～**53**，**55**～**58**は中期Ⅰ期（城之越式段階）に相当すると思われる。

(4) 総括

濠について，ＳＤ３がＨ10特定調査における４号濠とつながることは，両遺構の位置関係から確定されると思われる。一方，ＳＤ５については今後の調査でさらに検討する必要があると思われる。またＳＸ２において，弥生時代前期末から中期初頭の弥生土器と，断面丸形粘土帯を貼り付けた無文土器（水石里式）を一括資料としてえることができた。この不條地区（約4,000m²）は原の辻遺跡の中でも特に無文土器や擬無文土器が出土する地区で，その数は100数点に及ぶ。この密度の濃さは朝鮮半島系渡来人の存在を示唆していると思われる。

2．池田大原地区

(1) 調査概要

池田大原地区は県道工事に伴う発掘調査である。調査期間は平成18年12月11日から平成19年３月20日の51日間を要した。調査面積は県道敷設予定地のうち1,545㎡である。

この池田大原地区ではＨ９国補調査〔**宮崎1999**〕が行われている。この調査ではＩ区より環濠が確認されているが，それ他の調査区では目立った遺構や遺物の検出はなされていない。この背景には，近年の水田造成による土地改変が影響しているのかもしれない。

今回の調査では濠を２条（１号濠・２号濠），不明遺構を１基，ピットを294基確認した。

(2) 基本層序

池田大原地区の基本層序は５層からなる。１層は水田耕作土で色調は灰黄褐色（10YR4/2）である。２～３層は水田造成時の客土（造成土）で，切り出した土を運んで来たように多種の土がまだら状に混在する。４層は饅頭畑当時（水田造成以前）の耕作土と思われ，色調は黒褐色（10YR3/1）である。５層はいわゆる地山層（基盤層）である。調査区中央に断層があるため色調および土質が途中で異なる。５ａ層は玄武岩の風化したような土質で，多様な色調が混在する。主な色調は褐色（10YR4/4）である。５ｂ層はよくしまった粘土質の土で，色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）である。検出した遺構は，すべて５層に掘り込まれている。

(3) 遺構と遺物

遺構は検出規模および充填土（堆積状況）の説明を行っている。遺構の検討については(4)総括を参照されたい。また遺物についてはその特徴の説明を行っている。時期判断については『原の辻遺跡総集編Ｉ』「Ｖ遺物」〔**福田・中尾2005**〕を参照した。遺物の詳細な観察は**Tab. 6**～**Tab. 9**を参照されたい。

①１号濠

おおよそ東西軸に長さ約40m，幅約１ｍを測る。南東側ほど遺構が深くなることから，北西側は水田造成などで削平されている可能性が高い。断面はＵ字を呈する。遺構充填土は２層からなる。上層（１号濠①層）の色調は黒褐色（10YR2/2）で，遺構の上面に薄く堆積する。下層（１号濠②層）の色調は褐色（10YR4/4）で，均質な土である。下層は検出した１号濠の全範囲で確認され，かつ厚く堆積しているのに対し，上層は確認されない所もあり，また薄い堆積で対照的である。出土する遺物は上層および，下層の上部地点に多く位置していた。そのため出土遺物は上層と下層に分けて報告した。

次に１号濠上層の出土遺物を説明する。**63**～**69**は甕である。**63**は口縁部の断面が「コ」の字形となり，口唇部先端が口縁の屈曲部よりも高く位置し，口縁部が内側に傾斜する。**64**も同様であるが口縁部下に１条の突帯を施す。**65**は口縁部の断面が「コ」の字形となり，口唇部が水平に伸びる。**66**～**68**は口縁部の断面が「鋤先」形となり，口縁屈曲部内側のつまみ出しも明瞭となっている。口縁部下に

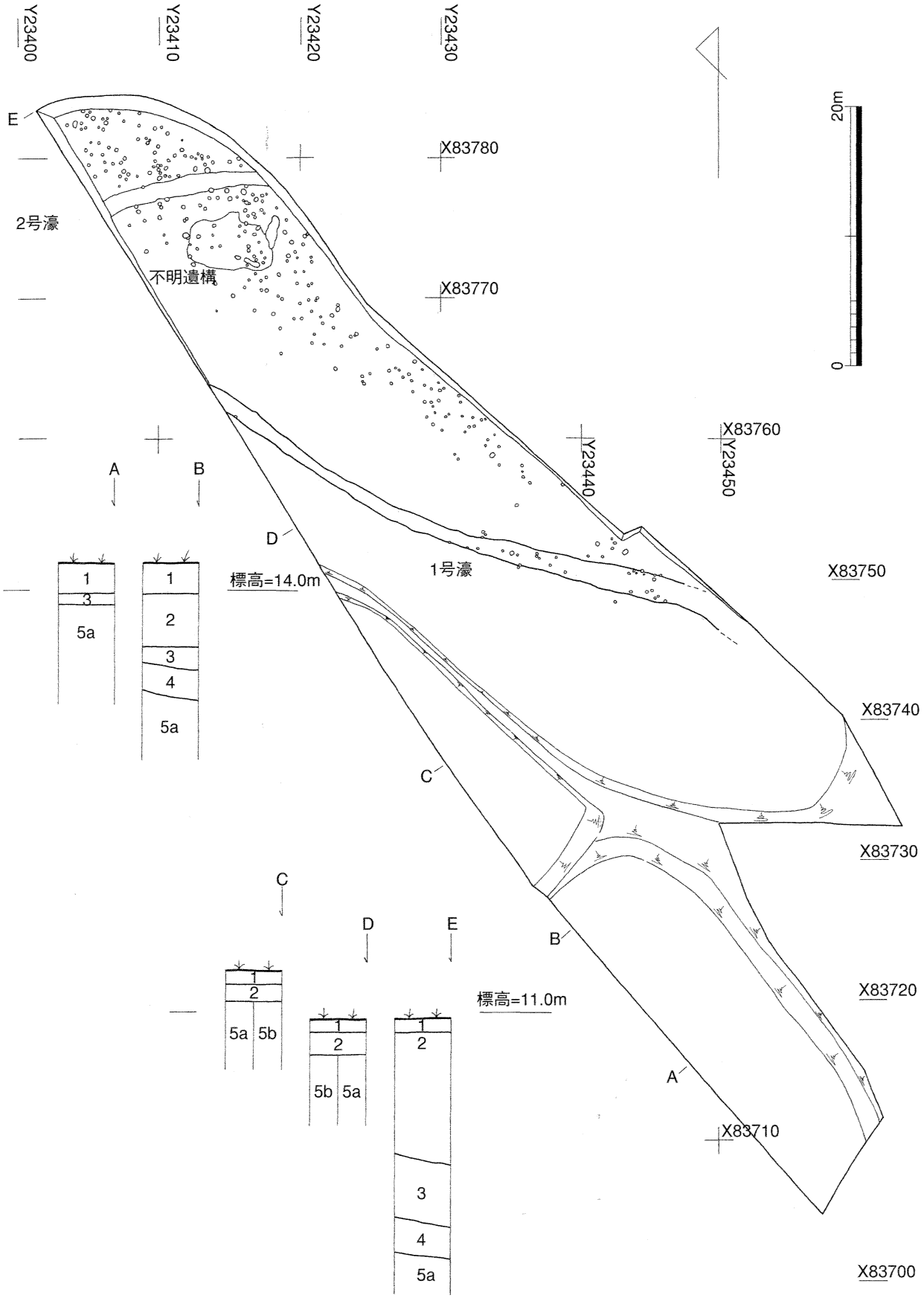


Fig. 15　池田大原地区全体図（1/400）および基本土層断面図（1/400）

１条の突帯を施す。69は口縁部の断面が「く」の字形となり，口縁部の先端をつまみ上げる，いわゆる「跳ね上げ口縁」で，時期は弥生時代中期中葉から後葉であろうか。70～72は壺である。70は短頸壺の口縁部である。口縁部の断面が「鋤先」形となる。鉱物の混入が少ない良質な胎土を用いて焼成されている。内外面ともに摩滅しているが，丹塗精製土器であった可能性が高い。71も同様に短頸壺の口縁部で，口縁屈曲部の内側につまみ出しがなされる。72は広口壺の口縁部である。口唇部が下方へ湾曲するように（口唇部の上面が凹みながら）伸びる。口唇部先端も意図的に面取りがなされている。73は甕の底部で，底が大きく凹み，底の裾部がやや広がる。74は壺の底部である。鉱物の混入が少ない良質な胎土を用いて焼成されている。内外面ともに摩滅が激しいが，袋状口縁壺などの丹塗精製土器であった可能性が高い。63～65は弥生時代中期Ⅲ期（須玖Ⅰ式新段階），66～68は中期Ⅳ期（須玖Ⅱ式古段階）に相当すると思われる。

続いて１号濠下層の出土遺物を説明する。75～108は甕である。75～76は口縁部の断面が「三角」形となる。76は口縁部下に１条の突帯を施す。77～80は口縁部の断面が「コ」の字形となり，口唇部先端が口縁屈曲部よりも高く，口縁部が内側に傾斜する。79は内面に丹塗りが施される。79と80は鉱物の混入が少ない良質な胎土で焼成されている。80は明瞭な丹塗りの痕跡はないが，口唇部上面が赤褐色を帯びている。81～86は口縁部の断面が「コ」の字形となり，口唇部が水平に伸びる。81と82は摩滅のためか器壁が薄くなっている。87～100は口縁部の断面がおおよそ「鋤先」形で，口唇部先端と口縁屈曲部がほぼ水平となり，口縁屈曲部の内側につまみ出しがなされる。87と88はともにほぼ完形に近い状態で出土しており，口縁部下に１条の突帯を施す。89は口縁部から胴部上半にかけて丁寧なヨコナデが施され，胴部にはタテハケメによる調整がなされる。90は口縁部下に１条の突帯を施す。口縁部から突帯にかけてヨコナデによる調整がなされる。91は口縁部上面に３条の線刻が掘り込まれている。線刻の深さは0.5㎜ほどで，ほぼ平行に並ぶ。鉱物の混入が少ない良質な胎土を用いて焼成されている。92は口縁部上面が広く平坦で，口縁屈曲部内側のつまみ出しが明瞭となっている。93は鉱物の混入が少ない良質な胎土で焼成されている。94は口唇部が先細り，口縁屈曲部内側をつまみ出す際の指跡が認められる。95は口縁部から胴部にかけて丁寧なヨコナデが施され，口縁屈曲部内側のつまみ出しが明瞭である。96は口縁部下に１条の突帯が施され，胴部にはタテハケメによる調整がなされる。突帯は粗雑に貼り付けられている。表面には煤痕が認められる。97は口縁屈曲部内側の内面をつまみ出す際の指跡が認められる。98は口縁部上面が丸みを帯びる。鉱物の混入が少ない良質な胎土で焼成されているため，明赤色に近い発色を見せる。99は口縁部上面に凹みが見られるため，98とは口縁部の形状が異なり，別個体と思われるが，用いられた胎土や器の規格はおそらく同じであろう。98と99は双子の器であると思われる。100は口縁部下に１条の突帯を施す。101～104は口縁部の断面がおおよそ「鋤先」形で，口唇部が垂れ下がり，口縁屈曲部の内側につまみ出しがなされる。101は口唇部全体が丸みを帯びる。鉱物の混入が少ない良質な胎土で焼成される。102は口縁部下に１条の突帯をめぐらせ，口唇部先端が凹面を施す。表面には丹塗りを施している。103は口縁部下に１条の沈線がめぐるように見えるが，全体的に摩滅が著しいため判然としない。口縁屈曲部内側のつまみ出しはあまり明瞭でない。104は口縁部下に１条の突帯を施す。全体的に摩滅が著しく，調整などは観察できないが，表面にはわずかに丹塗りの痕跡が残る。105～108は口縁部の断面が「く」の字形とな

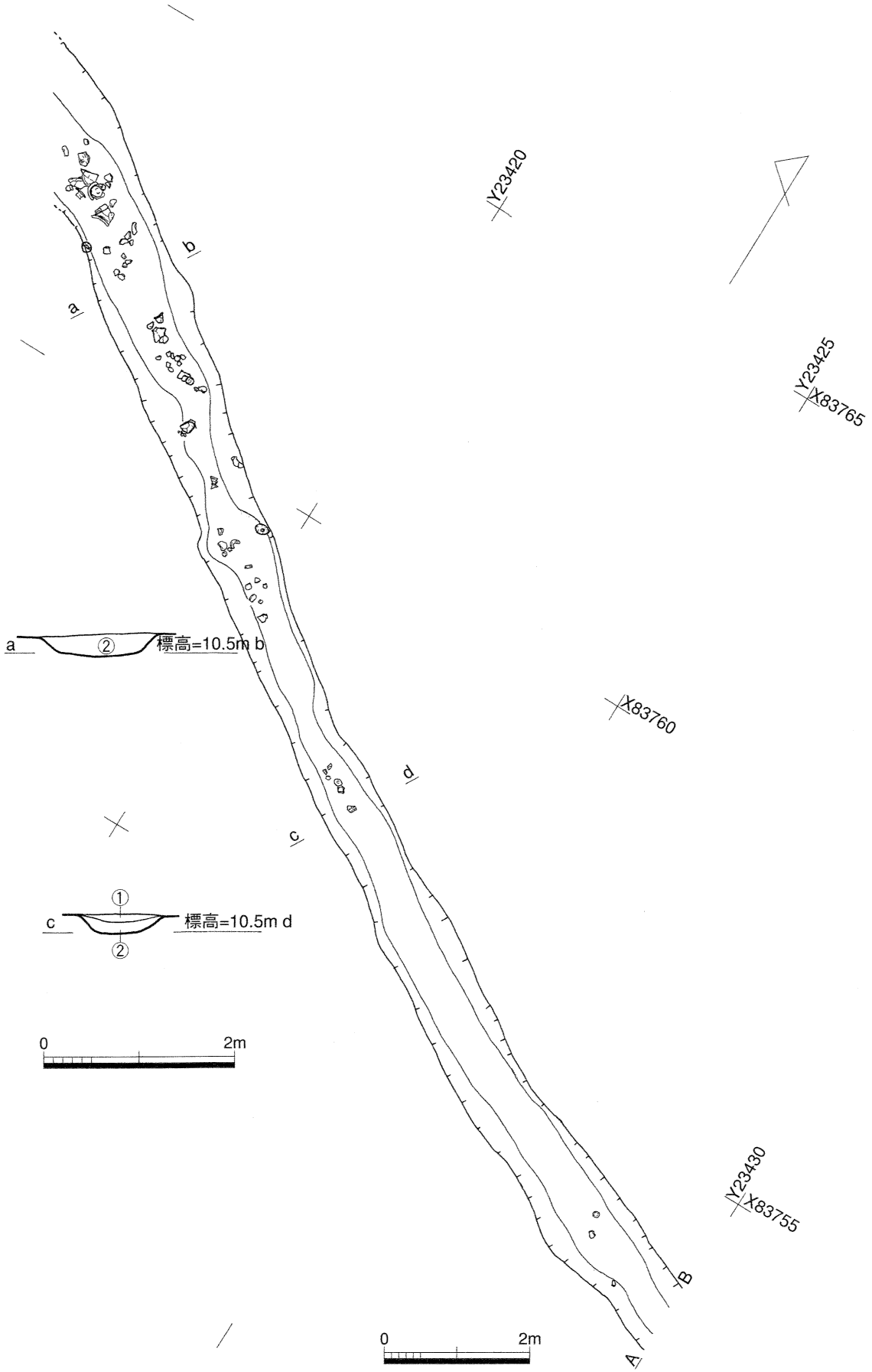


Fig. 16　池田大原地区１号濠遺構図（１/80）および土層断面図（１/60）①

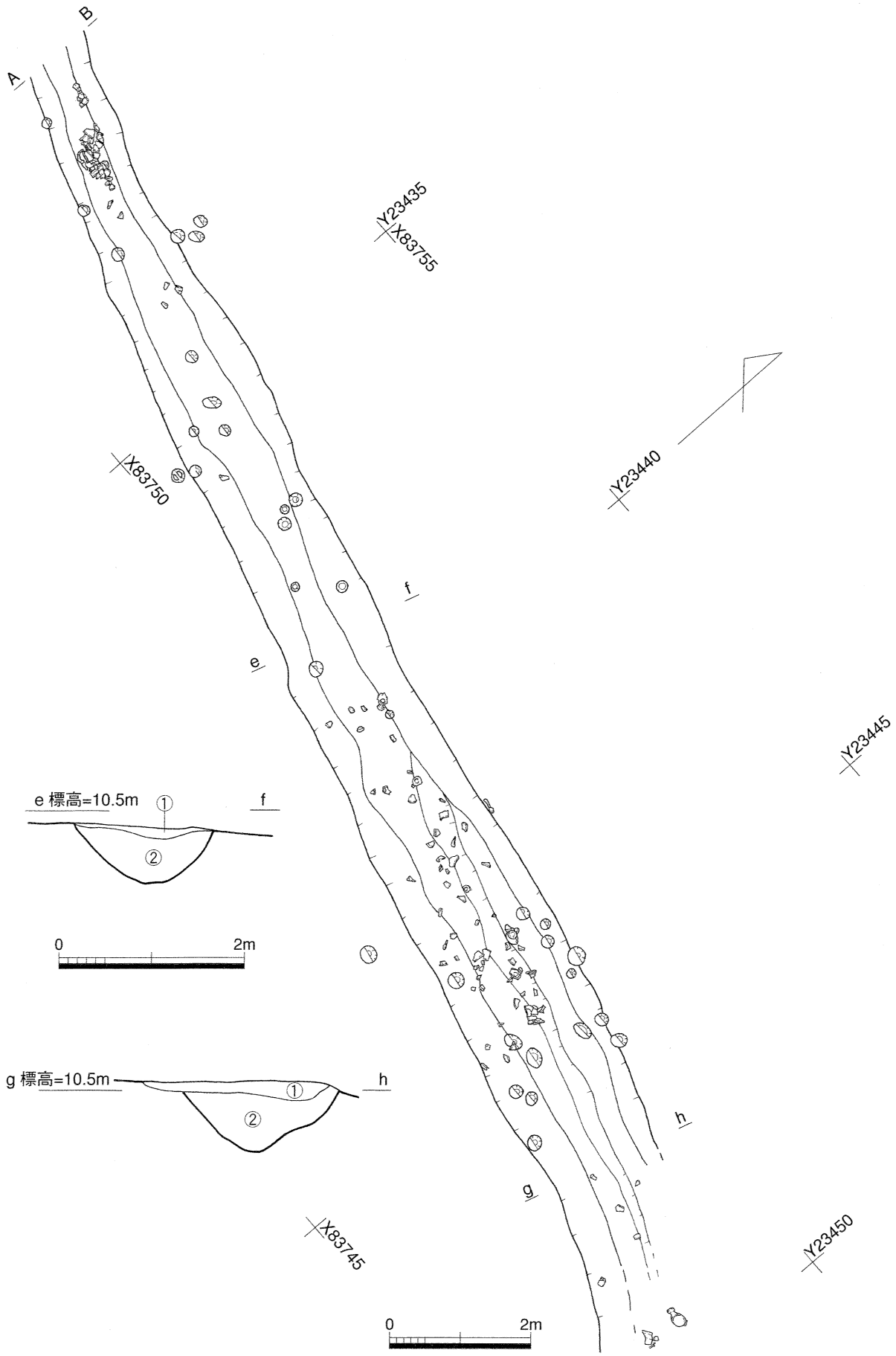


Fig. 17　池田大原地区１号濠遺構図（１/80）および土層断面図（１/60）②

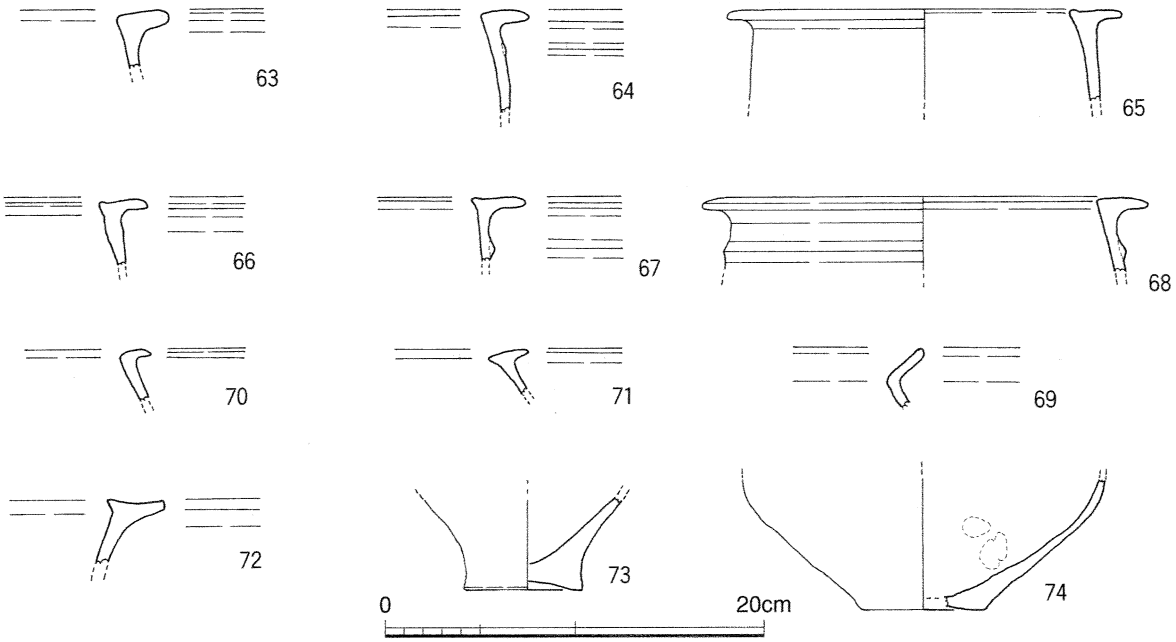


Fig. 18　池田大原地区１号濠上層出土遺物図（１/４）

る。105は口唇部が外湾するように広がり，口唇部先端が丸みを帯びる。口縁屈曲部内側の稜線はまだ明瞭でない。106は口唇部が口縁屈曲部から真っ直ぐに立ち上がり，口唇部先端が面取りされる傾向が見られる。107は口唇部が口縁屈曲部からやや内湾するように立ち上がり，口唇部先端の面取りも明瞭となる。108は口唇部が口縁屈曲部からやや内湾するように立ち上がり，口唇部先端上面をつまみ上げるように成形している。胴部の器壁が薄くなる傾向にある。全体的に摩滅しているが，表面に煤痕が付着している。109～115は甕の底部である。109は底が凹み，底の裾部がやや広がる。微粒の鉱物を密に含み，良好な焼成である。110～115は平底である。110は底部断面が「M」字形となり，やや厚めの底である。114は裏面に煤痕が認められる。115は全体的に摩滅が著しいものの表面に丹塗りの痕跡が認められる。116～121は壺である。116～117は袋状口縁壺である。116は口縁部下，および頸部から胴部にかけて３条の「M」字突帯がめぐらされ，突帯の間にはヘラミガキによる暗文が施される。表面には丹塗りの痕跡が認められ，鉱物の混入が少ない良質の胎土を用いて焼成されている。117は116と比べて袋状の口縁部がやや広がり，頸部のしまりも緩やかで全体的にずんぐりとした印象を受ける。表面には丹塗りの痕跡が認められる。118は短頸壺である。口縁部の断面が「鋤先」形で，口唇部がやや垂れる。表面には丹塗りの痕跡が認められる。119～121は広口壺である。119は口縁部の断面が「鋤先」形で口唇部が水平に伸び，口唇部先端は丸みを帯びる。口縁部内側のつまみ出しが明瞭である。120は口縁部の断面が「鋤先」形で，口唇部が先細りながら伸びる。口縁部内側のつまみ出しも明瞭である。121は口縁部の断面が「鋤先」形で，口縁部上面が凹面状となりつつ口唇部が伸びる。口縁部内側のつまみ出しも明瞭である。金雲母が多く混入する。122～124は鉢である。122は素口縁の鉢で，裏面に丹塗りの痕跡が認められる。表面の摩滅はそれほどでもないため，意図的に内面だけ丹塗りを施したと思われる。123は口縁部の断面が「鋤先」形となる。口唇部は先細りながら伸び，口縁部内側のつまみ出しは少ない。表面および裏面とも丹塗りの痕跡が認められるが，表面

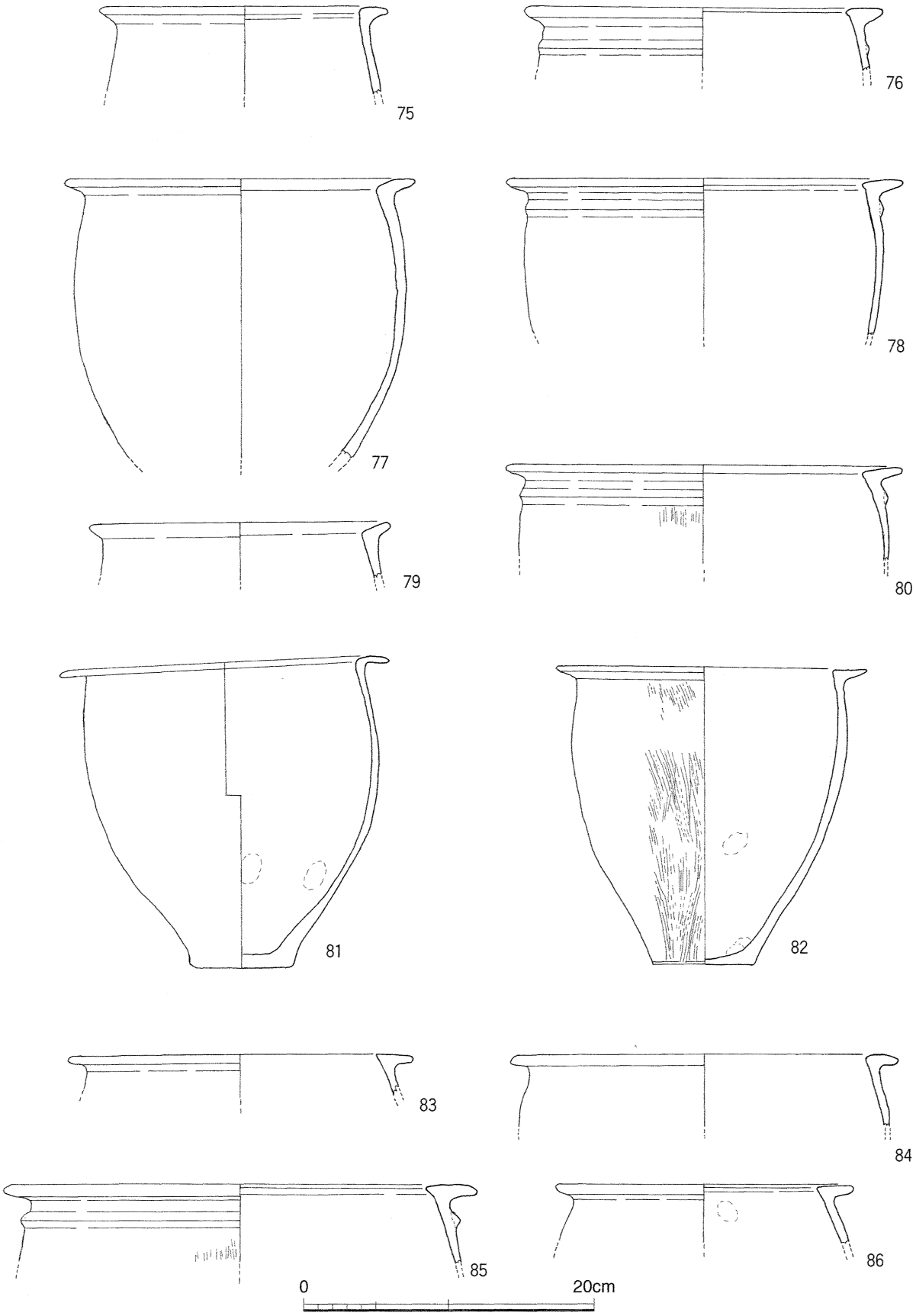


Fig. 19　池田大原地区１号濠下層出土遺物図（１/４）①

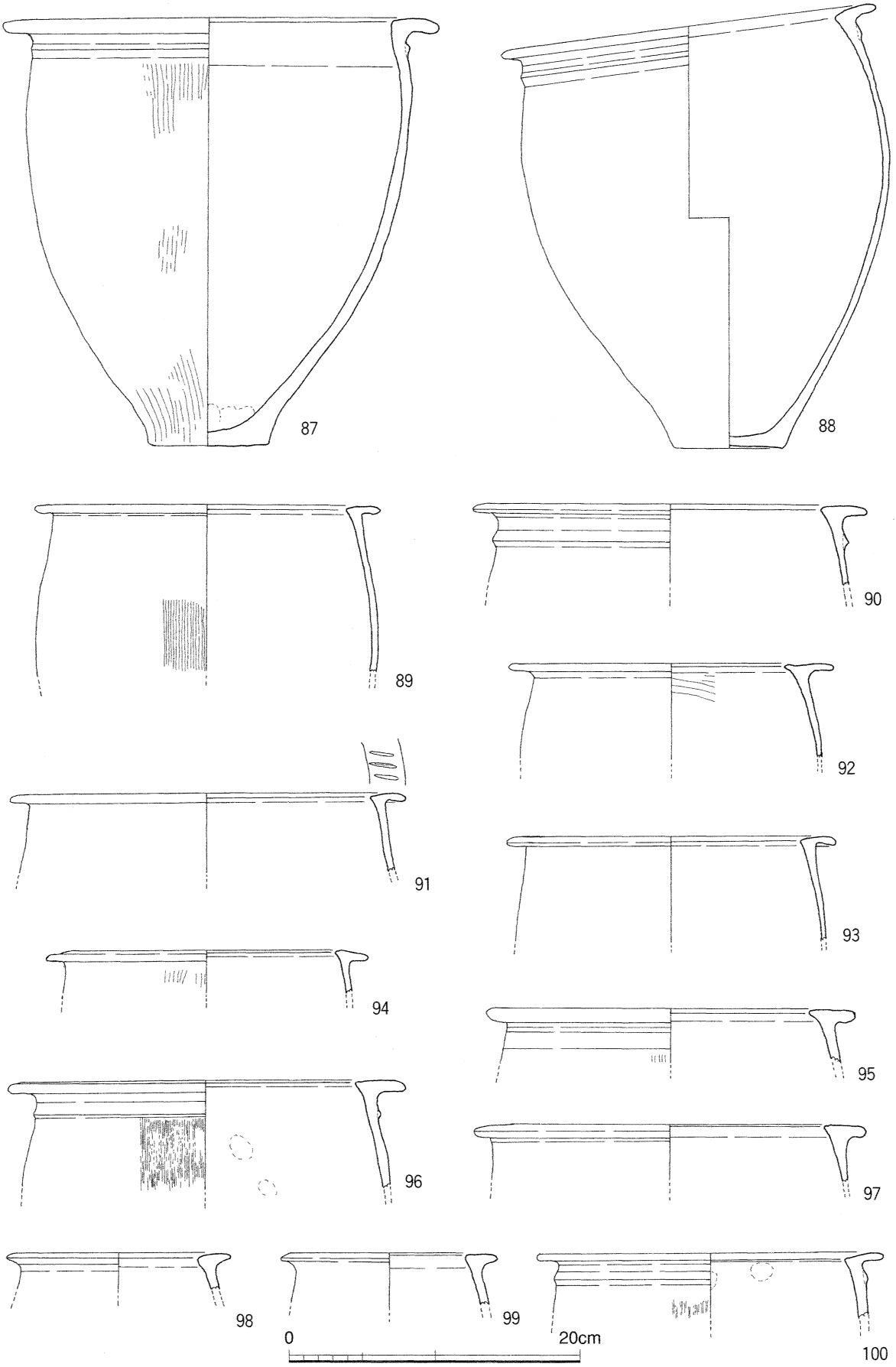


Fig. 20　池田大原地区１号濠下層出土遺物図（１/４）②

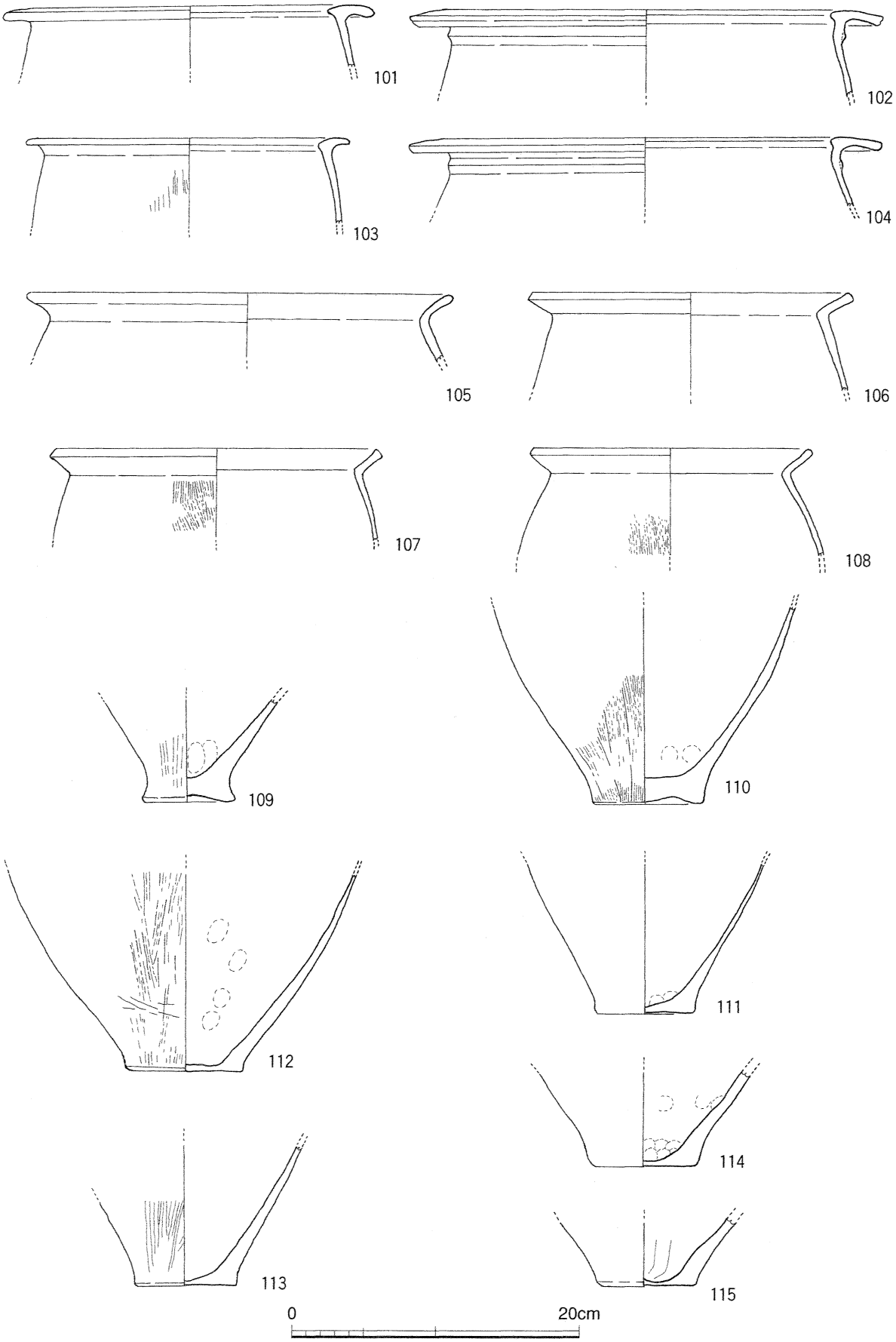


Fig. 21　池田大原地区１号濠下層出土遺物図（１/４）③

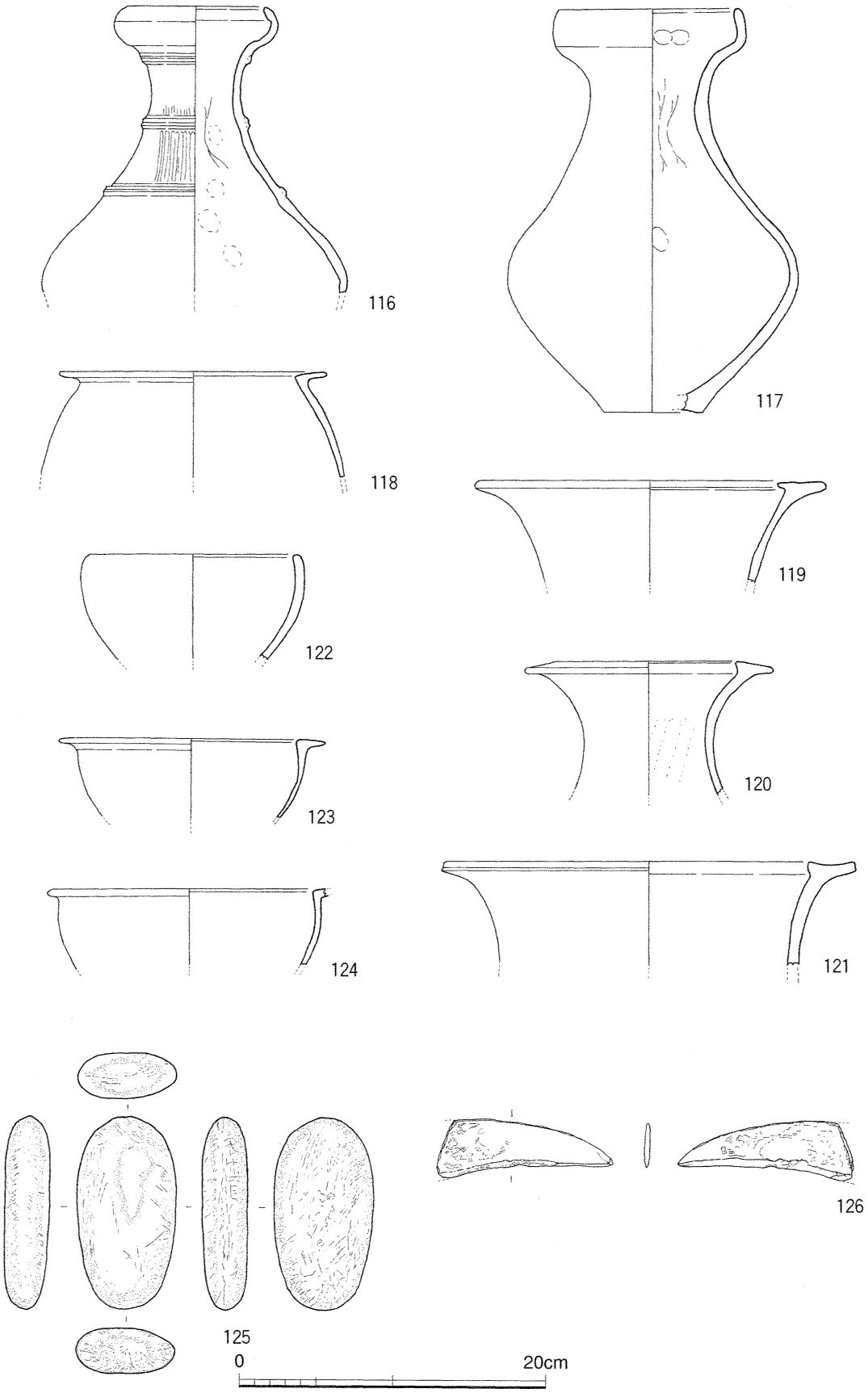


Fig. 22　池田大原地区１号濠下層出土遺物図（１／４）④

の摩滅が著しい。124は口縁部が欠損しているが，おそらくは「鋤先」形になるものと思われる。122同様に内面にのみ丹塗りの痕跡が認められる。125は敲石である。ちょうど手の平に収まる大きさで，長軸の両面に敲痕が認められる。126は石鎌である。刃部は内湾し，両面とも鋭利に研ぎ出されている。刃部の背面と基部の側面（石鎌の根本）は鈍角に交わる。75～76は弥生時代中期Ⅰ期（城之越段階），77～80は中期Ⅱ期（須玖Ⅰ式古段階），81～86は中期Ⅲ期（須玖Ⅰ式新段階），87～100は中期Ⅳ期（須玖Ⅱ式古段階），101～104は中期Ⅴ期（須玖Ⅱ式新段階）に相当すると思われる。

②2号濠

おおよそ東西軸に長さ10m，幅約1mを測る。調査区北側の傾斜で検出しており，傾斜の等高線に沿うように湾曲する。断面はU字を呈する。遺構充填土は1層（2号濠①層）からなる。色調は褐色（10YR4/4）で1号濠の下層に近似するが，風化礫などの混入物があり均質ではない。遺物は1点のみ出土した。

次に2号濠の出土遺物を説明する。127は甕の底部で，平底である。

③不明遺構

東西軸に約6m，南北軸に約4mを測る。調査区北側の傾斜地，2号濠の南側で検出した。おおよそ楕円形に平面の形状を呈する。検出当初は住居跡である可能性を考慮して調査を行ったが，柱穴跡が明確にないことや，床面に踏み締められた跡がないことなどから，不明遺構として報告した。遺構充填土は1層（不明遺構①層）からなる。色調は黒褐色（10YR2/2）で1号濠の下層に近似する。

次に不明遺構の出土遺物を説明する。128～146は甕の口縁部である。128～130は口縁部の断面が「三角」形となる。131～133は口縁部の断面が「コ」の字形となり，口唇部が水平に伸びる。134～145は口縁部の断面が「鋤先」形となり，口縁屈曲部内側のつまみ出しも明瞭となる。134～139および143は口縁部下に1条の突帯を施す。146は口縁部の断面が「く」の字となり，外湾しつつ立ち上がる。器壁も薄い。147～148は壺である。147は長頸で素口縁の頸部である。148は丸底の長頸壺である。147と148は古墳Ⅲ期に相当すると思われる。149～150は甕の底部で，ともに平底となる。151は壺の底部で，平底である。

④ピット群

調査区東側の傾斜で検出する傾向がある。そのため，ピット群の検出されない調査区西側の地域は，水田造成などで遺構検出面が削平されている可能性が高い。ピット群の充填土には2種類ある。1つは黒褐色の土で，残るは褐色の土である。これらは1号濠に充填する上層と下層に極めて色調が近い。そのためピット群を充填土色調で分類し，その位置関係から遺構の性格を検討したが，建物や柵，または杭列などの遺構を想定することはできなかった。

また遺物は数基のピットから出土したが，摩滅を激しく受けた破片ばかりで，遺構の性格を検討する材料とはならなかった。

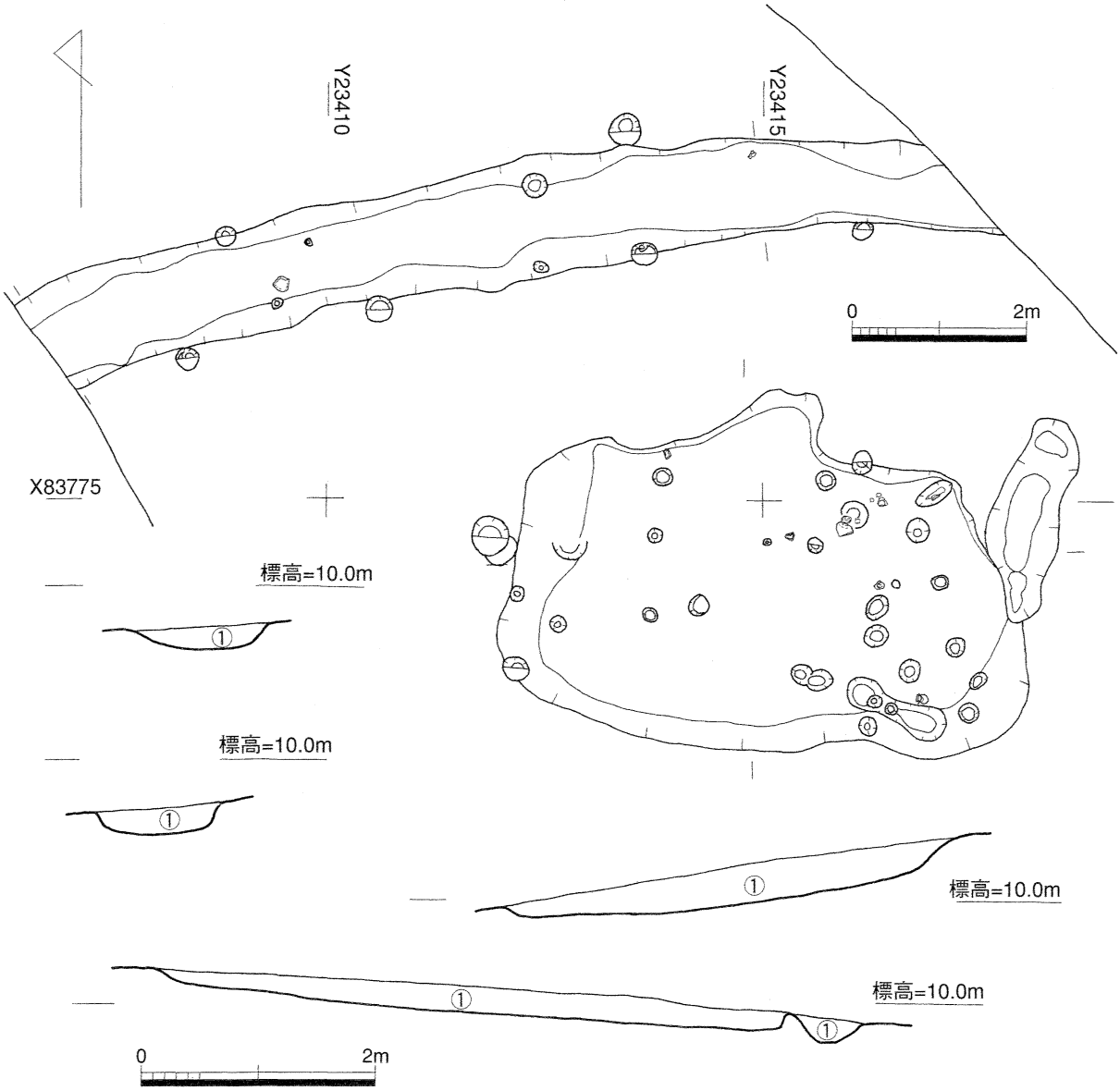


Fig. 23　池田大原地区２号濠・不明遺構図（１/80）および土層断面図（１/60）

(4)　総括

１号濠に堆積する充填土は２層と単純である。特に下層（１号壕②層）は層位の下部から上部までほぼ均質であり，水の浸食作用などによって漸次堆積したとは考えにくい。出土する遺物のほとんどが下層上面に位置し，かつ完形に近い状態で出土する遺物が多いことからも，この遺構が人為的に廃棄された結果，埋没したものと考えられる。また１号壕の堆積状況や出土遺物の状況から，１号濠が水を湛えた水濠ではなく，「空堀」であったことがうかがえる。遺構が南東側ほど深い現象は，遺構北西側が後世に削平されたことを物語ると思われる。

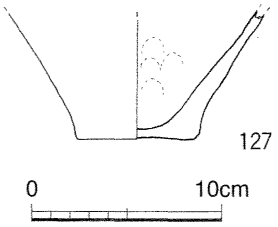


Fig. 24　池田大原地区２号濠出土遺物図（１/４）

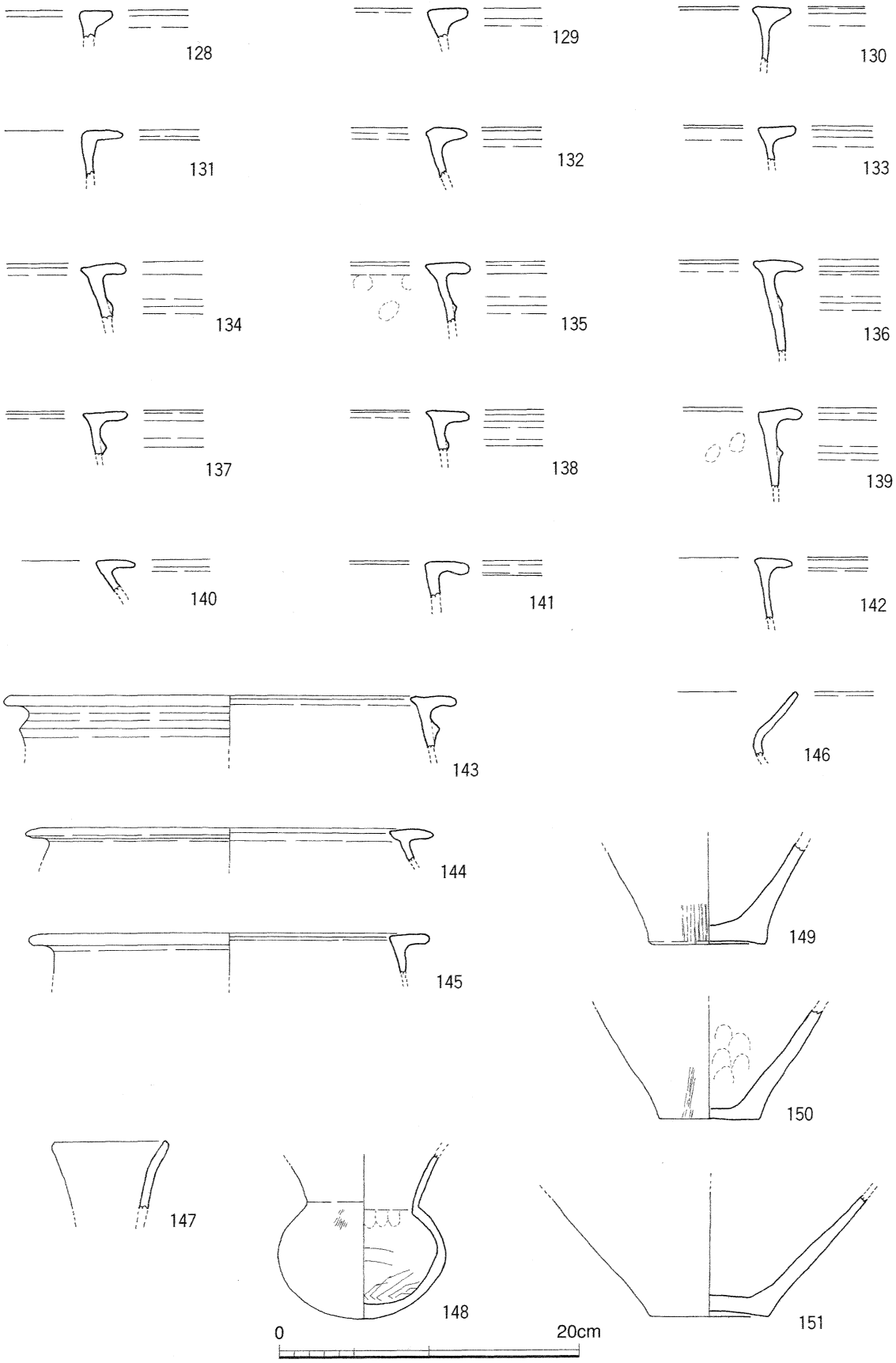


Fig. 25　池田大原地区不明遺構出土遺物図（1／4）

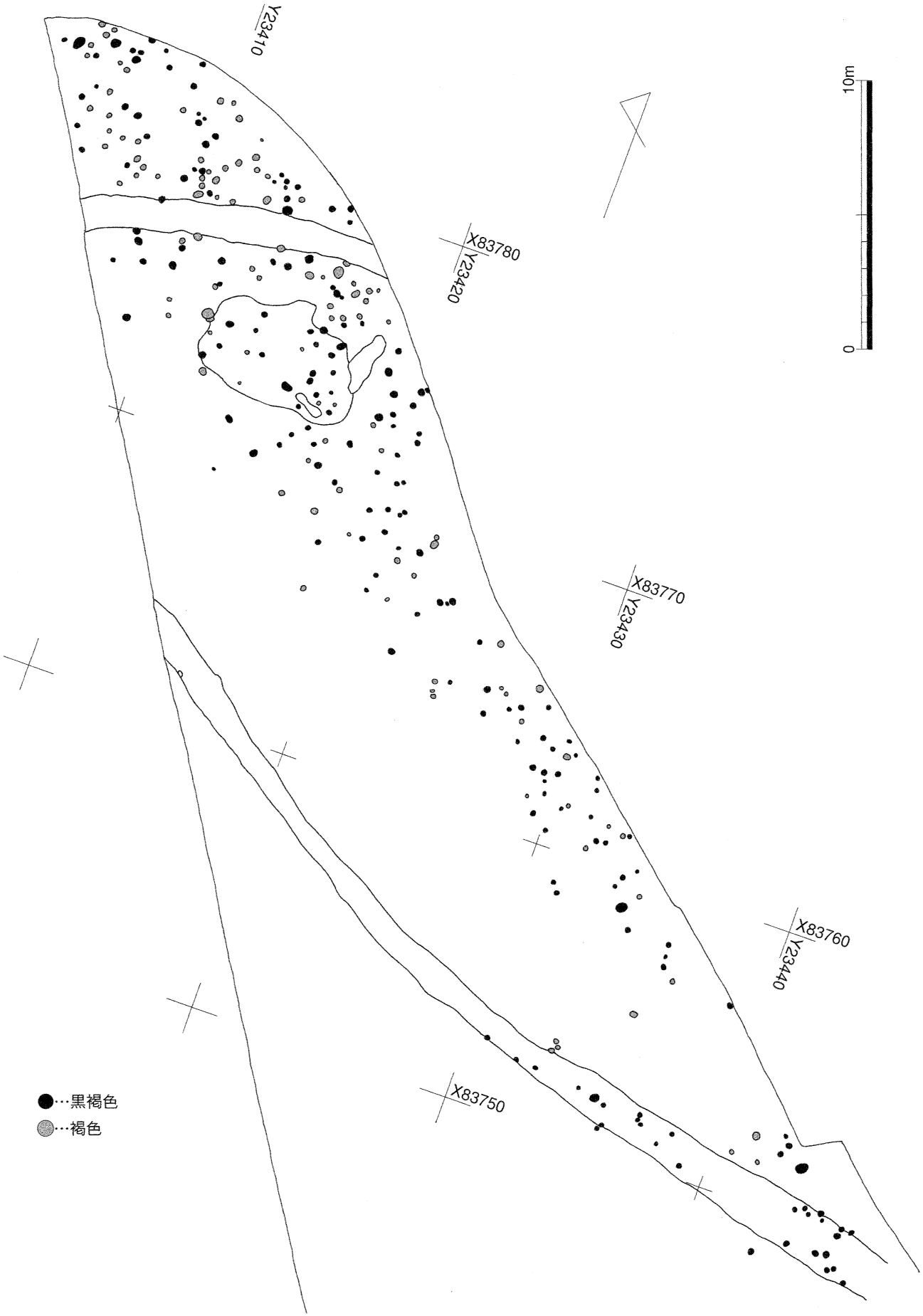


Fig. 26　池田大原地区ピット群図（1 /200）

次に下層（１号溝②層）から出土した遺物から検討する。上記の通り，下層から出土する遺物はその上面に位置するものが多い。また弥生時代中期が圧倒的に多く，残存状況も良好である。口縁部や底部の破片から器種の判断が可能な遺物は107点あり，器種比率は甕85点（79.4％），壺19点（17.8％），高坏ほか３点（2.8％）であった。下層から出土した甕口縁部で時期判断を行い，その個数を集計したものが**Tab. 4**である。なお，時期判断は『原の辻遺跡総集編Ⅰ』「Ⅴ遺物」〔**福田・中尾2005**〕を参照した。

１号濠が掘削された時期は，下層から出土した甕口縁部の様相から中期Ⅱ期（須玖Ⅰ古段階）頃と推測される。掘削された後，濠の整備（浚渫）が頻繁に行われたと仮定すれば，下層に含まれる中期Ⅱ期までの甕口縁部が少ないという現象の背景となりうる。その後，中期Ⅳ期（須玖Ⅱ古段階）～中期Ⅴ期（須玖Ⅱ新段階）の甕口縁部が急激に増える要因に，１号溝の埋没を想定することができる。なお，後期と判断されるものが９点確認されるが，これは上層からの混入である可能性が高い。

さらに上層（１号濠①層）から出土した遺物から検討を続ける。上層から出土した甕口縁部も下層と同様に時期判断を行った。**Tab. 4**はその集計である。上層から出土する甕口縁部に弥生時代後期の資料が存在しない現象からは，上層が１号濠を再掘した後の堆積であるとは考えにくい。しかしながら，上層がかなりの範囲かつ深度にわたって後世の削平を受けていることは容易に想像される。今回出土した遺物が，上層の堆積過程を明確に示しているとは言い切れない。

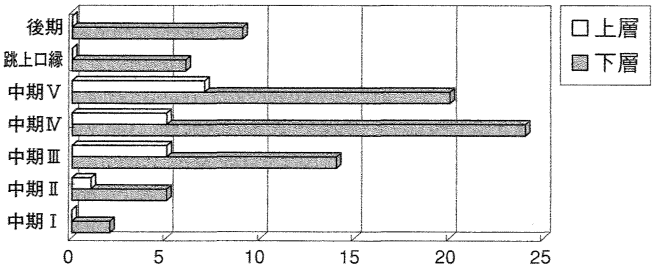
原の辻遺跡では，弥生時代前葉に環濠の掘削が行われ，中期後葉から中期終末にいったんは埋没する。その後，再び環濠の掘削が弥生時代後期前葉頃に行われ，後期後葉から終末にかけて再び埋没する傾向にあるとされる〔**宮崎2001**〕。１号濠の掘削および埋没も同様の変遷をたどったと仮定すれば，上層は弥生時代後期前葉頃に再掘削された後に弥生時代後期後葉～終末頃に再埋没していく過程での堆積と推測することができる。

なお，１号濠下層出土の甕（Fig. 20：88）に充填していた土壌を洗浄して得られた炭化物を加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定にかけたところ，2030±40年 BP（２σの暦年代で BC160～AD60）の年代値が得られた。この甕は型式的に中期Ⅳ期（須玖Ⅱ式古段階）の特徴をもつ。

【参考文献】

宮崎貴夫（2001）「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第４号（西海考古同人会）

甕口縁部類型	下層	上層	備考
中期Ⅰ	2	0	城之越段階
中期Ⅱ	5	1	須玖Ⅰ式古段階
中期Ⅲ	14	5	須玖Ⅰ式新段階
中期Ⅳ	24	5	須玖Ⅱ式古段階
中期Ⅴ	20	7	須玖Ⅱ式新段階
跳上口縁	6	0	中期Ⅳ～Ⅴ期に相当
後期	9	0	



Tab. 4　池田大原地区１号濠出土甕形土器口縁部時期別集計表

3．原ノ久保地区

(1) 調査概要

原ノ久保地区は県道工事でコンクリート溶壁を取り外した際に確認された濠の土層断面を記録したものである。H17県道調査〔2006林〕を実施した所であるが，当時はコンクリート壁が撤去されていなかったため，調査区内で確認することができなかった。

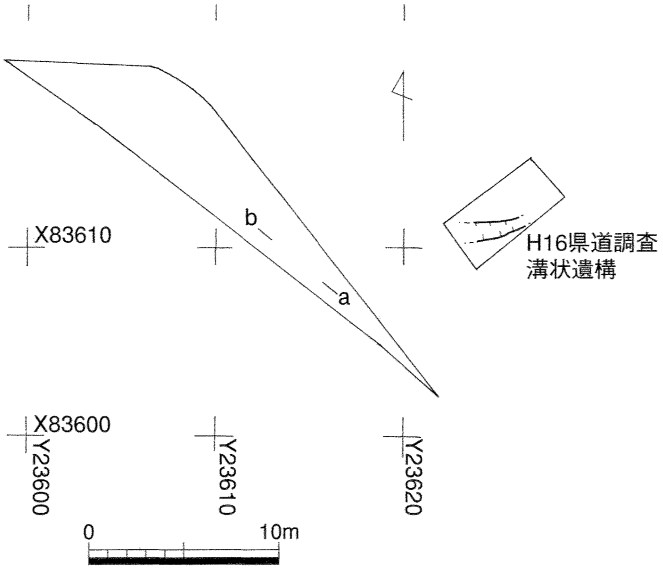


Fig. 27　原ノ久保地区全体図（1/400）

(2) 基本層序

1層から2層は明褐色の耕作土である。3層は弥生遺物包含層で粘質が強く，色調は暗褐色である。4層も弥生遺物包含層であるが，3層に比べやや明るい暗褐色の色調である。5層は遺構の掘り込み面となり，色調は明褐色である。6層は明黄色の基盤層である。

(3) 遺構

土層で確認された濠は断面V字を呈し，やや北側の傾斜が緩やかで左右非対称となる。遺構の充填土は10層からなる。①層は黒褐色粘質土層，②層は暗褐色粘質土層，③層は黒褐色粘質土層で炭化物をわずかに含む。④層は暗褐色粘質土層で，③層同様に炭化物をわずかに含む。⑤層は黒褐色度で，炭化物が③層～④層に比べ多く含まれる。⑥層は褐灰色粘質土層である。⑦層は暗褐色土層である。⑧層は⑦層よりもやや暗い暗褐色で，粘質は弱くなる。⑨層は黒色土で，炭化物が見られる。⑩層は明褐土層である。

(4) 総括

この遺構はH16県道調査〔2006林〕で確認した溝状遺構につながるものと思われる。H17県道調査でこの溝状遺構の続きを確認できなかったことから，この濠が北へ向きを変えると報告した。しかしながら，今回の確認で，この濠がH17県道調査を実施した丘陵を越えて西側へ延びる可能性が高まった。

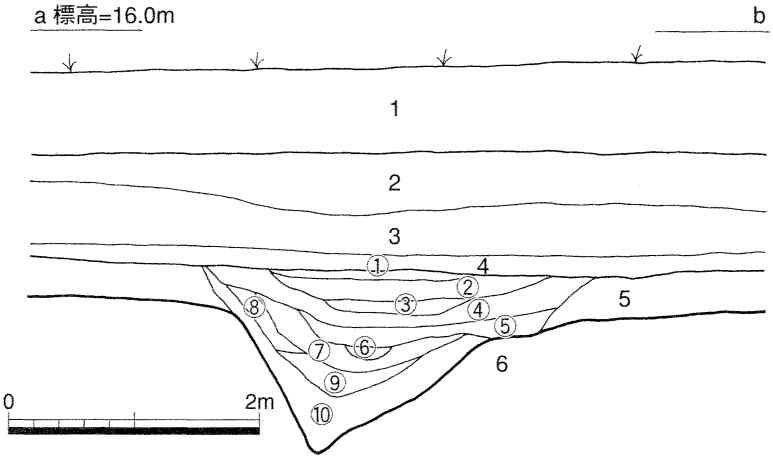


Fig. 28　原ノ久保地区濠土層断面図（1/60）

報告番号	調査地区 調整手法	遺構	層位	色調番号(外)	色調番号(内)	胎土 備考	器種	残存部位
1	不條 表:口縁=ヨコナデ　胴部=タテハケメ　裏:ナデ	ＳＤ３	－	10YR8/4浅黄橙	5YR7/4にぶい橙	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁～胴部
2	不條 表:ヨコナデ　内:ヨコナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ３	－	7.5YR7/2明褐灰	10YR7/1灰白	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁～胴部
3	不條 表:口縁=ヨコナデ　裏:ヨコナデ	ＳＤ３	－	2.5YR6/3にぶい橙	7.5YR5/2灰褐	１条突帯	甕	
4	不條 表:ヨコナデ　裏:口縁=ヨコナデ　胴部=ケズリ	ＳＤ３	－	10YR7/2にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石	甕	口縁～胴部
5	不條 全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＤ３	－	10YR8/3浅黄橙	10YR4/1褐灰	石英・長石 スス痕のような付着物(内面)	甕	底部
6	不條 全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＤ５	－	5YR7/6橙	10YR5/1褐灰	石英・長石	甕	口縁部
7	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ５	－	10YR6/3にぶい黄橙	2.5YR7/2灰黄	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁部
8	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ５	－	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/2明褐灰	石英・長石 短頸壺?	壺	口縁部
9	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ５	－	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/2灰褐	石英・長石 広口壺	壺	口縁部
10	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ５	－	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR6/8橙	石英・長石 素口縁広口壺	壺	口縁部
11	不條 全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＤ５	－	2.5YR6/4にぶい橙	5YR5/2灰褐	石英・長石	甕	底部
12	不條 表:粘土帯にユビオサエ　裏:ナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ５	－	10R6/3にぶい赤橙	7.5R7/1明赤灰	石英・長石 無文土器(朝鮮半島系土器)	甕	口縁～胴部
14	不條 表:粘土帯にユビオサエ　裏:ナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ１	－	7.5YR7/6橙	10YR7/2にぶい黄橙	石英・長石	甕	口縁部
15	不條 全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＤ１	－	5YR5/6明赤褐	2.5YR7/2灰黄	石英・長石 丹塗(表面)	壺	口縁部
16	不條 全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＤ１	－	10YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石 丹塗(表面)　袋状口縁壺	壺	口縁部 「十字」線刻
17	不條 表:口縁=ヨコナデ　裏:ヨコナデ	ＳＤ２	－	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/2にぶい黄橙	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁～胴部
18	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	ＳＤ２	－	2.5YR7/4淡赤橙	5YR6/6橙	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁～胴部
19	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ２	－	7.5YR7/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁～胴部
20	不條 表:口縁=ヨコナデ　裏:ナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ２	－	7.5YR6/4にぶい橙	10YR5/1褐灰	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁～胴部
21	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ２	－	5YR5/6明赤褐	10YR7/2にぶい黄橙	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁～胴部
22	不條 表:摩滅が著しく,詳細は不明　裏:ヨコナデ	ＳＤ２	－	10YR6/3にぶい黄橙	10R5/8赤	石英・長石 丹塗(裏面)	甕	口縁～胴部
23	不條 表:摩滅が著しく,詳細は不明　裏:ヨコナデ	ＳＤ２	－	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	石英・長石 丹塗(表面)	甕	口縁～胴部
24	不條 表:摩滅が著しく,詳細は不明　裏:ヨコナデ	ＳＤ２	－	10YR7/3にぶい黄橙	5YR4/6赤褐	石英・長石 丹塗(表・裏両面)	高坏	口縁部
25	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	ＳＤ２	－	5YR5/6明赤褐	10YR7/3にぶい黄橙	石英・長石 丹塗(表面)　「M字」突帯	壺	口縁部
26	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ２	－	7.5YR6/3にぶい褐	2.5YR8/2灰白	石英・長石	甕	口縁部
27	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	ＳＤ２	－	5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	石英・長石 跳ね上げ口縁	甕	口縁部
28	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ　全体的に摩滅しており,詳細は不明	ＳＤ２	－	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	石英・長石	鉢	口縁部
29	不條 摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＤ２	－	10R6/6赤橙	5YR6/6橙	石英・長石	甕	底部
30	不條 表:ヨコナデ　裏:ナデ	ＳＤ２	－	5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石 丹塗(表面)	壺	底部
31	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	ＳＤ２	－	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR5/1褐灰	石英・長石 甕棺材	甕棺	口縁部
32	不條 全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＤ４	－	10R5/4赤褐	2.5YR5/6明赤褐	石英・長石	甕	口縁部
33	不條 表:摩滅が著しく,詳細は不明　裏:ヨコナデ	ＳＤ４	－	7.5YR4/2灰褐	2.5YR6/4にぶい橙	石英・長石	甕	口縁部
34	不條 全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＤ４	－	10R6/6赤橙	5YR7/6橙	石英・長石	甕	口縁部
35	不條 全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＤ４	－	5YR5/3にぶい赤褐	10R6/4にぶい赤褐	石英・長石・金雲母	甕	口縁部
37	不條 表:摩滅が著しく,詳細は不明　裏:ハケメ	ＳＸ１	－	2.5YR5/6明赤褐	10YR6/2灰黄褐	石英・長石・金雲母	甕	口縁～胴部
38	不條 表:ナデ　裏:ナデ	ＳＸ１	－	2.5YR7/4淡赤橙	2.5YR7/8橙	石英・長石	甕	口縁～胴部
39	不條 表:ナデ　裏:ナデ	ＳＸ１	－	7.5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	石英・長石	甕	口縁部
40	不條 表:ナデ　裏:ナデ	ＳＸ１	－	2.5YR6/6橙	10YR7/3にぶい黄橙	石英・長石・黒雲母	甕	底部

Tab. 5　土器観察表①

報告番号	調査地区 調整手法	遺構	層位	色調番号(外)	色調番号(内)	胎土 備考	器種	残存部位
41	不條 表:ナデ　裏:摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＸ１	－	10R6/8赤橙	2.5YR7/6橙	石英・長石	甕	底部
42	不條 表:ハケメ　裏:口縁=ハケメ　胴部=ナデ	ＳＸ２	－	7.5YR5/2灰褐	10YR6/3にぶい黄橙	石英・長石・金雲母 沈線(１条)	甕	口縁～胴部
43	不條 表:ハケメ　裏:口縁=ハケメ　胴部=ナデ	ＳＸ２	－	5YR7/6橙	7.5YR7/3にぶい橙	石英・長石 刻目(口唇部下端)	甕 沈線(１条)	口縁～胴部
44	不條 表:口縁=ナデ　胴部=ハケメ　裏:ナデ	ＳＸ２	－	5YR7/4にぶい橙	10YR6/2灰黄褐	石英・長石・黒雲母 沈線(１条)	甕	口縁～胴部
45	不條 表:摩滅が著しく,詳細は不明　裏:口縁=ハケメ	ＳＸ２	－	5YR6/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	石英・長石・金雲母 刻目(口唇部下端)	甕 突帯(１条)	口縁～胴部
46	不條 表:ナデ　裏:ナデ　全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＸ２	－	10YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/3にぶい橙	石英・長石 沈線(１条)	甕	口縁～胴部
47	不條 表:ナデ　裏:ナデ　全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＸ２	－	7.5YR7/4にぶい橙	2.5YR6/8橙	石英・長石 沈線(２条)	甕	口縁～胴部
48	不條 表:口縁=ユビオサエ　裏:ナデ	ＳＸ２	－	7.5YR5/3にぶい橙	10YR5/2灰黄褐	石英・長石・金雲母 刻目(口唇部下端)	甕	口縁部
49	不條 表:ヨコナデ　裏:ハケメ	ＳＸ２	－	7.5YR7/3にぶい橙	5YR6/6橙	石英・長石 刻目(口唇部下端)	甕 刻目突帯(１条)	口縁部
50	不條 表:ヨコナデ　裏:ハケメ	ＳＸ２	－	10R6/6赤橙	10R6/6赤橙	石英・長石 刻目(口唇部下端)	甕	口縁部
51	不條 表:口縁=ユビオサエ　ナデ　裏:ナデ　全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＸ２	－	10YR5/3にぶい黄橙	10YR8/2灰白	石英・長石・金雲母 刻目(口唇部下端)	甕	口縁部
52	不條 表:ハケメ　ナデ　裏:ナデ	ＳＸ２	－	7.5YR3/1黒褐	10YR3/2黒褐	石英・長石・金雲母 刻目突帯(１条)	甕	口縁部
53	不條 表:ヨコナデ　裏:ナデ	ＳＸ２	－	10YR2/1黒	10YR6/2灰黄褐	石英・長石 刻目(口唇部下端)	甕 突帯(１条)	口縁部
54	不條 表:ヨコナデ　裏:ハケメ　ナデ	ＳＸ２	－	7.5YR5/2灰褐	7.5YR8/4浅黄橙	石英・長石・金雲母	甕	口縁部
55	不條 表:口縁=ハケメ　胴部=ヘラナデ　裏:ヨコナデ	ＳＸ２	－	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石・金雲母 沈線(２条)	壺	口縁～胴部
56	不條 全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	ＳＸ２	－	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/4浅黄橙	石英・長石・金雲母	壺	口縁部
57	不條 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	ＳＸ２	－	10YR7/2にぶい橙	10YR6/2灰黄褐	石英・長石・金雲母 刻目(口唇部下端)	壺	口縁部
58	不條 表:ハケメ　裏:ユビオサエ	ＳＸ２	－	2.5Y3/1黒褐	2.5Y8/2灰白	石英・長石	甕	底部
59	不條 表:ハケメ　裏:ナデ	ＳＸ２	－	7.5YR7/6橙	10YR7/2にぶい黄橙	石英・長石・金雲母	甕	底部
60	不條 表:ナデ	ＳＸ２	－	7.5YR7/6橙	－	石英・長石	土製錘	完形
61	不條 表:ナデ　裏:ユビオサエ	ＳＸ２	－	5YR6/4にぶい橙	5YR5/1褐灰	石英・長石 無紋土器(朝鮮半島系土器)	甕(鉢?)	口縁部
62	不條 表:ナデ　裏:ナデ	ＳＸ２	－	7.5YR5/3にぶい橙	7.5YR5/2灰褐	石英・長石 無紋土器(朝鮮半島系土器)	甕(鉢?)	口縁部
63	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ナデ	１号濠	上層	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	石英・長石	甕	口縁部
64	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	１号濠	上層	2.5YR6/8橙	2.5YR5/6明赤褐	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁～胴部
65	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	１号濠	上層	2.5YR6/8橙	2.5YR5/8明赤褐	石英・長石	甕	口縁～胴部
66	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	１号濠	上層	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁部
67	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ナデ	１号濠	上層	5YR6/6橙	5YR6/8橙	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁部
68	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	１号濠	上層	5YR6/6橙	5YR6/4にぶい橙	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁部
69	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ナデ	１号濠	上層	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	石英・長石 跳ね上げ口縁	甕	口縁部
70	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ナデ	１号濠	上層	5YR7/8橙	5YR7/8橙	石英・長石 短頸壺	壺	口縁部
71	池田大原 表:ナデ　裏:ナデ	１号濠	上層	2.5YR6/8橙	5YR6/6橙	石英・長石 短頸壺	壺	口縁部
72	池田大原 表:ナデ　裏:ナデ	１号濠	上層	5YR6/6橙	5YR6/6橙	石英・長石	壺	口縁部
73	池田大原 表:摩滅が著しく,詳細は不明　裏:ヨコナデ	１号濠	上層	5YR5/5明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	石英・長石	甕	底部
74	池田大原 摩滅が著しく,詳細は不明	１号濠	上層	5YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	石英・長石	壺	底部
75	池田大原 表:ヨコナデ・ナデ　裏:ヨコナデ・ナデ	１号濠	下層	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/6橙	石英・長石	甕	口縁～胴部
76	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ナデ	１号濠	下層	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁部
77	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	１号濠	下層	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石	甕	口縁～胴部
78	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	１号濠	下層	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石 突帯(１条)	甕	口縁～胴部

Tab. 6　土器観察表②

報告番号	調査地区 調整手法	遺構	層位	色調番号(外)	色調番号(内)	胎土 備考	器種	残存部位
79	池田大原 表:ヨコナデ　裏:	1号濠	下層	7.5YR7/4にぶい橙	2.5YR5/6明赤褐	石英・長石 丹塗(裏面)	甕	口縁部
80	池田大原 表:ヨコナデ・タテハケメ　裏:ナデ	1号濠	下層	5YR6/6橙	5YR6/6橙	石英・長石 突帯(1条)	甕	口縁～胴部
81	池田大原 表:ナデ　裏:ナデ　全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	1号濠	下層	5YR5/8明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	石英・長石	甕	完形
82	池田大原 表:ナデ　裏:ナデ　全体的に摩滅が著しく,詳細は不明	1号濠	下層	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	石英・長石	甕	ほぼ完形
83	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	1号濠	下層	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	石英・長石	甕	口縁部
84	池田大原 表:ナデ　裏:摩滅が著しく,詳細は不明	1号濠	下層	7.5YR6/6橙	10YR4/3にぶい黄橙	石英・長石	甕	口縁部
85	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	1号濠	下層	5YR6/6橙	5YR7/6橙	石英・長石 突帯(1条)	甕	口縁部
86	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ナデ	1号濠	下層	5YR6/4にぶい橙	5YR6/6橙	石英・長石	甕	口縁部
87	池田大原 表:口縁～突帯=ヨコナデ　胴部=タテハケメ　裏:口縁=ナデ	1号濠	下層	7.5YR6/6橙	5YR6/8橙	石英・長石 突帯(1条)	甕	完形
88	池田大原 表:口縁～突帯=ヨコナデ　胴部=タテハケメ　裏:口縁=ナデ	1号濠	下層	2.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	石英・長石 突帯(1条)	甕	完形
89	池田大原 表:口縁～胴部上半=ヨコナデ　胴部=タテハケメ　裏:口縁=ヨコナデ	1号濠	下層	5YR6/6橙	5YR6/6橙	石英・長石	甕	口縁～胴部
90	池田大原 表:口縁～突帯=ヨコナデ　胴部=タテハケメ　裏:口縁=ナデ	1号濠	下層	5YR6/8橙	5YR6/6橙	石英・長石 突帯(1条)	甕	口縁部
91	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　裏:口縁=ヨコナデ	1号濠	下層	5YR6/6橙	5YR6/8橙	石英・長石 線刻(口縁部上面に3条)	甕	口縁部
92	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　裏:口縁=ヨコナデ	1号濠	下層	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	石英・長石	甕	口縁部
93	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　裏:口縁=ヨコナデ	1号濠	下層	5YR6/8橙	5YR6/6橙	石英・長石	甕	口縁～胴部
94	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　胴部=タテハケメ　裏:ヨコナデ	1号濠	下層	5YR4/4にぶい赤褐	5YR4/6赤褐	石英・長石	甕	口縁部
95	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　裏:ナデ	1号濠	下層	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	石英・長石・金雲母	甕	口縁部
96	池田大原 表:胴部=タテハケメ　裏:ナデ	1号濠	下層	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR6/6橙	石英・長石 突帯(1条)・煤痕(表面)	甕	口縁～胴部
97	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　裏:口縁=ヨコナデ	1号濠	下層	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	石英・長石	甕	口縁部
98	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　裏:口縁=ヨコナデ	1号濠	下層	2.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙	石英・長石	甕	口縁部
99	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　裏:口縁=ヨコナデ	1号濠	下層	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	石英・長石	甕	口縁部
100	池田大原 表:口縁～突帯=ヨコナデ　裏:ナデ	1号濠	下層	5YR7/6橙	5YR6/6橙	石英・長石 突帯(1条)	甕	口縁部
101	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　胴部=タテハケメ　裏:口縁=ヨコナデ	1号濠	下層	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	石英・長石	甕	口縁部
102	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ナデ	1号濠	下層	2.5YR4/8赤褐	2.5YR6/6橙	石英・長石 突帯(1条)・丹塗(表面)	甕	口縁部
103	池田大原 表:タテハケメ　摩滅が著しく,詳細は不明	1号濠	下層	5YR6/6橙	5YR5/4にぶい赤褐	石英・長石 沈線(1条)	甕	口縁部
104	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	1号濠	下層	5YR6/6橙	5YR6/6橙	石英・長石 突帯(1条)・丹塗(表面)	甕	口縁部
105	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　胴部=ハケメ　裏:口縁=ヨコナデ	1号濠	下層	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石	甕	口縁部
106	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　裏:口縁=ナデ	1号濠	下層	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/4浅黄橙	石英・長石	甕	口縁部
107	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　胴部=タテハケメ　裏:ヨコナデ	1号濠	下層	5YR6/6橙	7.5YR5/4にぶい褐	石英・長石	甕	口縁部
108	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　胴部=タテハケメ　裏:ナデ	1号濠	下層	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	石英・長石 煤痕(表面)	甕	口縁部
109	池田大原 表:タテハケメ	1号濠	下層	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	石英・長石	甕	底部
110	池田大原 表:タテハケメ　裏:ナデ	1号濠	下層	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	石英・長石	甕	底部
111	池田大原 摩滅が著しく,詳細は不明	1号濠	下層	5YR6/6橙	5YR2/1黒褐	石英・長石	甕	底部
112	池田大原 表:タテハケメ　裏:ナデ・ユビオサエ	1号濠	下層	5YR7/6橙	5YR6/6橙	石英・長石	甕	底部
113	池田大原 表:タテハケメ　裏:摩滅が著しく,詳細は不明	1号濠	下層	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	石英・長石	甕	底部
114	池田大原 表:摩滅が著しく,詳細は不明　裏:ユビオサエ	1号濠	下層	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR3/2黒褐	石英・長石 煤痕(裏面)	甕	底部
115	池田大原 表:ナデ　裏:摩滅が著しく,詳細は不明	1号濠	下層	2.5YR4/8赤褐	7.5YR6/6橙	石英・長石 丹塗(表面)	甕	底部
116	池田大原 表:口縁=ヨコナデ　頸部:ヘラミガキ　裏:ヨコナデ	1号濠	下層	2.5YR6/8橙	2.5YR6/6橙	石英・長石 M字突帯(3条)・暗文・丹塗(表面)	壺 袋状口縁壺	口縁～胴部

Tab. 7　土器観察表③

報告番号	調査地区 調整手法	遺構	層位	色調番号(外)	色調番号(内)	胎土 備考	器種	残存部位
117	池田大原 表:ナデ　裏:ナデ	1号濠	下層	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	石英・長石 丹塗(表面)　袋状口縁壺	壺	ほぼ完形
118	池田大原 表:口縁～胴部=ヨコナデ　裏:ナデ	1号濠	下層	2.5YR5/4にぶい赤褐	5YR6/4にぶい橙	石英・長石 丹塗(表面)　短頸壺	壺	口縁～胴部
119	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	1号濠	下層	7.5YR6/6橙	10YR6/3にぶい黄橙	石英・長石 広口壺	壺	口縁～頸部
120	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ナデ	1号濠	下層	5YR6/8橙	5YR6/8橙	石英・長石 広口壺	壺	口縁～頸部
121	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	1号濠	下層	5YR6/6橙	5YR6/6橙	石英・長石・金雲母 広口壺	壺	口縁～頸部
122	池田大原 表:ナデ　裏:ヨコナデ	1号濠	下層	2.5YR6/8橙	10YR4/6赤	石英・長石 丹塗(裏面)　素口縁	鉢	口縁～胴部
123	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ナデ	1号濠	下層	7.5YR6/4にぶい橙	2.5YR4/6赤褐	石英・長石 丹塗(表・裏面)	鉢	口縁～胴部
124	池田大原 表:ナデ　裏:ナデ	1号濠	下層	2.5YR6/3にぶい橙	7.5YR6/6橙	石英・長石 丹塗(裏面)	鉢	口縁～胴部
127	池田大原 表:摩滅が著しく,詳細は不明　裏:ユビオサエ	2号濠	－	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	石英・長石	甕	底部
128	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁部
129	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	7.5YR7/4にぶい橙	5YR7/6橙	長石・石英	甕	口縁部
130	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR6/8橙	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁部
131	池田大原 摩滅が著しく,詳細は不明	不明遺構	－	5YR6/8橙	5YR6/8橙	長石・石英	甕	口縁部
132	池田大原 表:ヨコナデ　裏:摩滅が著しく,詳細は不明	不明遺構	－	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石・石英	甕	口縁部
133	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR6/6橙	5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁部
134	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR6/6橙	長石・石英 突帯(1条)	甕	口縁部
135	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	長石・石英 突帯(1条)	甕	口縁部
136	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英 突帯(1条)	甕	口縁部
137	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英 突帯(1条)	甕	口縁部
138	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR6/6橙	5YR6/6橙	長石・石英 突帯(1条)	甕	口縁部
139	池田大原 表:胴部=タテハケメ　口縁部=ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	10YR8/4浅黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英 突帯(1条)	甕	口縁部
140	池田大原 表:ヨコナデ　裏:摩滅が著しく,詳細は不明	不明遺構	－	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	長石・石英	甕	口縁部
141	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英	甕	口縁部
142	池田大原 表:ヨコナデ　裏:摩滅が著しく,詳細は不明	不明遺構	－	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石・石英	甕	口縁部
143	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石・石英 突帯(1条)	甕	口縁部
144	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	長石・石英	甕	口縁部
145	池田大原 表:ヨコナデ　裏:ヨコナデ	不明遺構	－	2.5YR6/6橙	2.5YR6/8橙	長石・石英	甕	口縁部
146	池田大原 摩滅が著しく,詳細は不明	不明遺構	－	7.5YR5/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	口縁部
147	池田大原 表:ナデ　裏:ナデ	不明遺構	－	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石・石英 長頸壺	壺	口縁部
148	池田大原 表:ナデ　裏:口縁部=ナデ　胴部=ヘラケズリ	不明遺構	－	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/2灰褐	長石・石英	壺	ほぼ完形
149	池田大原 表:タテハケメ・ナデ　裏:ナデ	不明遺構	－	10R6/8赤橙	7.5YR4/1褐灰	長石・石英	甕	底部
150	池田大原 表:タテハケメ・ナデ　裏:ナデ	不明遺構	－	2.5YR6/8橙	5YR6/6橙	長石・石英	甕	底部
151	池田大原 表:ナデ　裏:ナデ	不明遺構	－	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	長石・石英	甕	底部

Tab. 8　土器観察表④

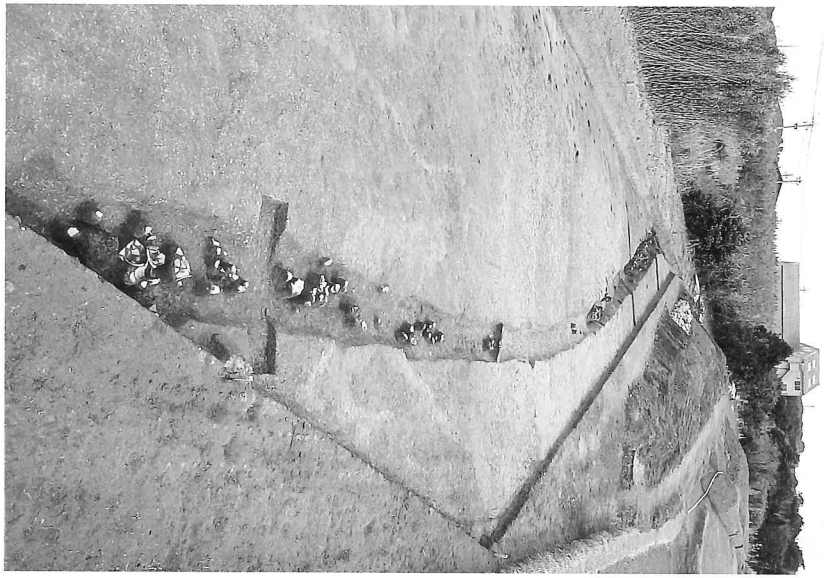
報告番号	調査地区	遺構	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	器種	石材	備考
13	不條	SD5	－	104	77	41	576	敲石		
36	不條	SD4	－	51	11	10	9.4	片刃石斧	頁岩	
125	池田大原	1号濠	下層	127	65	30	410	敲石		
126	池田大原	1号濠	下層	115	39	4	21.4	石鎌	頁岩	刃部内湾・両刃研ぎだし

Tab. 9　石器観察表

Pho. 6　池田大原地区　基本層序

Pho. 7　池田大原地区　1号濠土層断面

Pho. 9　池田大原地区　2号濠土層断面



Pho. 8　池田大原地区　1号濠完掘状況

Pho. 10　池田大原地区　２号濠および不明遺構完掘状況

Pho. 11　池田大原地区　作業風景

Pho. 12　不條地区　ＳＸ２遺物出土状況

Pho. 13　不條地区　作業風景

長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所，池田大原地区１号溝下層の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

放射性炭素年代測定は，呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が，放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の^{14}C濃度は一定ではなく，年代値の算出に影響していることから，年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に換算する必要がある。

２．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	池田大原地区，１号溝下層	炭化物	acid/alkali/acid	AMS

acid/alkali/acid：酸－アルカリ－酸洗浄
AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

３．測定結果

試料名	測定No.（Beta-）	未補正^{14}C年代（年 BP）	$\delta^{13}C$（‰）	^{14}C年代（年 BP）	暦年代 Calendar Age（２σ：95%確率，１σ：68%確率）
No.1	228485	2050±40	−26.3	2030±40	交点：Cal BC40 ２σ：Cal BC160～AD60 １σ：Cal BC60～AD10

BP：Before Physics（Present），Cal：Calibrated，BC：紀元前，AD：紀元後

(1) 未補正^{14}C年代

試料の$^{14}C/^{12}C$比から，単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5730年とされているが，国際的慣例によりLibbyの5568年を用いて計算している。

(2) $\delta^{13}C$（デルタ）測定値

試料の測定$^{14}C/^{12}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の$\delta^{13}C$値を−25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(3) ^{14}C年代

$\delta^{13}C$測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

(4) 暦年代（Calendar Age）

^{14}C年代を実際の年代（暦年代）に近づけるには，過去の宇宙線強度の変動などによる大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。較正には，年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン／トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。IntCal 04ではBC 24050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC 10450年まで）。

暦年代の交点は，^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し，1σ（68%確率）と2σ（95%確率）は，^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点や複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

4．所　　見

加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定の結果，池田大原地区1号溝下層の炭化物では，2030±40年BP（2σの暦年代でBC 160～AD 60年）の年代値が得られた。

【文献】

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
尾嵜大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費弥生農耕の起源と東アジア№3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p. 14-15.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p. 1-36.

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書
巻次	⑤
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	林　隆広
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地１　TEL0920(45)4080
発行年月日	2008年１月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡 （はるつじ）	長崎県壱岐市 芦辺町・石田町	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	20061211 ～ 20070320	〔不條〕 92m² 〔池田大原〕 1,545m²	主要地方道勝本石田線道路改良工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	〔不條〕 濠 溝状遺構 土坑 〔池田大原〕 １号濠 ２号濠 不明遺構 ピット群 〔原ノ久保Ａ〕 環濠	弥生式土器 土師器 石器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第37集

原の辻遺跡

2008. 1. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂